

# 「第19回 さくらサミット in よしの」

## 会議録

平成22年7月16日(金)

吉野山ふるさとセンター

主催 / 吉野町、財団法人自治総合センター、  
第19回さくらサミット in よしの実行委員会

## 主催者あいさつ：吉野町長 北岡 篤

皆さんおはようございます。御紹介いただきました吉野町長の北岡です。

まず、ごあいさつの前に、先日来の梅雨末期の豪雨により、全国各地で災害が起きておりまして、亡くなられた方、行方不明の方、出ているようです。あらためまして、被災された皆様方へ、お悔やみ並びにお見舞いの弁を述べ、そして一刻も早い復興を願いたいと思っております。

さて、吉野の桜の木々は緑に覆われ、木漏れ日も輝く季節となりました。本日は、吉野によくおいでくださいまして、心から歓迎いたします。「第19回さくらサミット in よしの」の開催にあたり、全国さくらサミット加盟自治体の皆様には、何かとお忙しいなか遠方よりお越しいただきまして、また準備の段階から何かとお世話をおかけしまして、誠にありがとうございました。

さて、このサミットは、桜をキーワードとしたまちづくりを推進している自治体が連携を取り、共に発展していくことを目的として開催されていますが、私も吉野町での開催は2回目になります。前は、平成6年に「桜文化の醸成」というテーマで、開催しました。古来から日本人の心の深きところに咲き、日本の歴史・文学と深く関わりながら、地域の文化を創り上げてきた桜を保護・育成し、その恩恵を受けながら、加盟自治体の交流連携を含め、そして、地域特有の桜の文化の醸成に取り組んでいく。そして、一層の地域活性化を図っていくところとしたところです。

しかしながら、最近では若干情勢が変わって参りました。近年、環境の変化などにより、桜樹の被害が、全国的に叫ばれるようになりました。当町におきましても、地元の財団法人吉野山保勝会が中心となり、桜の保護・育成に努めて参りましたが、近年、吉野山の桜の状況は、深刻さが増しております。本日御出席いただきました皆様方のその地におきましても、さまざまな問題点や御苦労をお持ちのことと思っております。

そこで今回は、「未来へ！桜を守り育てよう」というテーマの元に、毎春すばらしい景色で人々の目を楽しませ、心をいやしてきた日本の代表的な花、桜の景観を絶やさず、後世に伝えていくことこそ、わたしたちの使命であると考え、先人たちの思い入れを再認識し、後世に残していくために何が必要なのか、各地のさまざまな問題点や取組などを討議していただき、よりよい解決策を見いだす出発点とすることで、各地の桜のまちづくりの未来に、寄与できるものと確信いたしております。

最後に、このサミットを開催するにあたり、御後援、御協力いただきました関係各位に、あらためて感謝を申し上げますとともに、本日参加いただきました皆様方の御健勝と御多幸を祈念いたしまして、開催にあたってのごあいさつとさせていただきます。本日は、誠にありがとうございます。

## 来賓あいさつ:奈良県文化観光局長 廣野 隆信

御紹介いただきました、奈良県文化観光局長の廣野と申します。

本日は、「第19回さくらサミット in よしの」が、多くの方々がお越しになる中で開催されましたこと、心からお祝い申し上げたいと思います。19回という回を重ねておられるということ、全国で21の加盟団体の中で開催されておりますこと、本当に大変なことかと思えます。そういう面でも、敬意を表したいと思っております。

また、先ほど町長のお話でも、今、桜がいろいろな地球環境の変化等の中で、樹勢が衰退しているというようなお話がありました。ここ吉野の地におきましても、吉野の桜を守るという熱い心を持った方々が、熱心に桜の保全に努力されているということです。その中で、21の全国から集まった方々、桜をキーワードとしたまちづくりを進めている全国の団体の方々が集まり、そういった課題を含め、いろいろな議論が展開されていること、本当に、有意義な集いだという風に思います。

さて今、奈良県におきましては、平城遷都1300年ということで、メイン会場であります平城宮跡を中心に、県内各地の市町村でいろいろな取組、さらには、社寺の御協力を頂く中で、秘宝秘仏の特別公開等を行っているところです。ここ吉野の地におきましても、今日もお見えになっておりますが、金峯山寺の方で、金剛蔵王権現像を100日間、特別開帳していただくということもございます。そういう中で、ぜひ、この機会に全国から来られた方も含めまして、県内各地を巡っていただけたらという風にも思います。

また、1300年記念事業以降におきましても、古事記、日本書紀、万葉集、さらには地方伝承をテーマにした、さまざまな取組も検討していきたいということで、今いろいろ企画を練っているところです。そういう意味で、奈良の本当に奥深い魅力を今後もいろいろな面で見えていただけたら、非常に幸いと思います。

本日、本当に多くの方に集まっていた中、いろいろな面で桜を未来に守り育てるというテーマの元で、活発な御議論をされ、桜を守りながらまちづくりを進めていくための有意義な1日となるよう御祈念申し上げまして、簡単ではございますが、ごあいさつとさせていただきます。本日は、お招きいただきまして、ありがとうございました。

## 記念講演「日本人の桜」

竹林院住職・前吉野町長 福井 良盟

皆さんおはようございます。御紹介いただきました、さくらサミットから感謝状を受けている福井でございます。20年も町長をやっていると、いろいろなところから感謝状や表彰状をもらうのですが、ほかは誰も持っていない表彰状を持っているということは、私の一つの誇りです。非常にありがたいと思って、今も大事に保管してあります。

今日私が何でこんな格好で出てきたのかというのをまず言っておかなければいけないと思います。昨日、参加自治体の皆さんは、田中宗務総長のお話しをお聞きになったと思います。吉野で桜の話をする以上、私は、坊主であるということを自覚しながらしゃべらなければいけない。その内容については、昨日のお話を聞かれた方は、皆さん御存知だと思います。坊主らしからぬ事を言うかも知れませんが、坊主だという自覚を持ってしゃべっているということを御認識いただきたいと思います。

まず、今日は非常に楽しい。町長をやっている間は、あいさつは3分以内、5分以内とやってこられたのですが、今日は50分しゃべらせてもらえる。非常にありがたいことです。ただ昨日、田中宗務総長のお話を1時間聞かれたということなので、なぜ宗務総長のお話しが1時間で、おれは50分なんだということも、酔った拍子に言わせていただいております。しかし、50分間、皆さん方と楽しくお付き合いさせていただきたいと願っているところです。

始まる前に、きれいな歌を歌ってくれました。万葉の歌と、吉野の山桜の歌を歌っていただきました。聞いていますと、一連のものということで、万葉の時代から吉野の山桜は、非常に有名だったんだなという風に、イメージされる方がいらっしゃるかと思います。

万葉集には、吉野をうたった歌がたくさんあるんですよ。ただ、吉野の桜をうたった歌は一首もないんです。万葉の歌の続きに、吉野の歌をうたわれたら、これも万葉時代の吉野の歌かなと思われたら、非常に具合が悪いので、そのことをお断りしておきたいと思います。万葉時代、吉野の歌の中で一番私が気に入っているのは、天武天皇の歌で、レジュメのようなものを書かせていただきましたが、「よき人の よしとよく見て よしと言ひし 吉野よく見よ よき人よく見」という歌を歌っていただきました。それを歌にしたら、そのまま吉野の町歌になるのではないかと考えて、ちょっと画策したことがあるのですが、私は音楽家の知り合いが全くいまして、それに曲をつけてくれとだれにも頼むことができませんでした。今、あんな万葉の歌をすばらしい音色にしてくださっている方がいらっしゃるのですから、あれを音楽にしてくれたらなという風に、ふと考えたところがございます。

ここまで言ったら、もう昨日の田中総長の話と違うではないかと。田中総長は、役行者さんが蔵王権現を感得し、そのお姿を桜の木に彫った。そこから、桜が、蔵王権現さんの御神木になったという話を恐らくされたと思います。万葉集の時代といえば、奈良時代で

すよね。奈良時代以前の歌を集めたのが万葉集です。ところが万葉集に桜の歌は一つもない。何でだ？と。桜はあったでしょう。特に山桜は、原生種ですから、当然、日本中の山の中に桜の木はあったはずです。蔵王権現を感得された役行者さんが、桜の木に、そのお姿を記憶の鮮明なうちに刻んでおこうと考えても不思議ではない。しかし、役行者さんは7世紀末の人ですから、その直後710年から、奈良時代が始まります。その奈良時代の後半になって作られた万葉集に、桜と吉野を、蔵王権現と結びつけた歌がない。おかしいじゃないかということになってこようかと思います。

この格好をしておりますので、宗教的な話をちょっと先にしますが、奈良時代のわれわれの先人、修行者のことを五来重先生は、「原初修験道」と表現されました。その修験道の原初形態というのは、どんなものであったかということが、いろいろな角度から推察されています。一番はっきりしていることは、この吉野に仏教集団があったということ、これは確実な話です。仏教が伝来したのは、552年、あるいは537年。要するに、欽明天皇の14年ということになっていますが、その次の年、吉野寺という寺が、続日本記に出てくるんです。今の淀町にあります世尊寺が、その後を次いでいるということになっています。それだけ早く仏教が取り入れられた、それは嘘だろうと。嘘だろうと考える前に、本当だったらどういうことかなと考えるのが、普通ではないでしょうか。仏教学者は、みんな嘘だろうと飛ばしてしまっています。欽明天皇の14年、光るクスノキがぶかぶかと浮かんでいた。これはありがたいということで、その光ったクスノキを仏像にして安置したのが、吉野寺ということになっています。どんな仏像であったかというのは、書いてありません。その後、現代の比叡寺は、現光寺という名前と呼ばれたり、比叡三寺といわれたり、吉野寺といたりということで、現代に伝わってきています。

仏教伝来の後、蘇我物部の争いがあったということも、歴史をちょっと習った方なら、ご存知かと思います。まだ日本として正式に、仏教を取り入れるということにはなされていない。蘇我物部の争いが結末を向かえてから、正式に仏教を日本の国教みたいな扱いにしたわけですから、その遙か以前に、仏教を取り入れた次の年に、吉野にお寺ができているんです。それだけ吉野というところは、昔から特殊な地域であった。どういう特殊な地域であったかといいますと、万葉集にはあまり出てきませんが、漢詩で集めた資料が書かれた懐風藻には、いろいろ出てきます。特に吉野の地域は、仙人の住むところ、神仙の住むところであるという表現がしてあり、それが後の陶淵明などのいう桃源郷のイメージと重なっています。要するに道教の聖地ですね。

それと同時に、恐らく寺の名前として、日本の先史記録に載っている最初の寺は吉野寺でしょう。仏教も吉野がいち早く取り入れた。取り入れたのはだれかということ、吉野の人が取り入れたというよりも、よそから吉野に移り住んできた人が取り入れていたと考えるのが、普通ではないでしょうか。正式伝来の次の年ということは、もう正式伝来以前から、仏教は吉野には入ってきていたという風に考える方が、むしろ自然な解釈ではないかと思えます。

そのときに、町の人、大和盆地の人は吉野をどう見ていたか。さっきいいました道教の神仙境。あるいは仏教の聖地、道場という事の裏に、何でもいいけれど、吉野というのは特殊な地域だというイメージがあったというのが、ごく普通の話であると、私は思っています。普通の判断でそういう考え方というのは、ちょっとひねって考えると、自分たちの今住んでいるところとは別の場所。どういう意味で別の場所だったかという、これは簡単です。日本の国を作っていた大和盆地の人たちは、弥生文化を営んでいます。弥生文化によって、日本の国は出来上がっていきました。ところが、吉野ではまだ縄文生活をしていました。山の中ですから当然のことです。弥生文化で非常に豊かになった人たちにとって、縄文人というのは、どういう風に見られたか。考えてみましょう。

縄文人というのは、弥生人の農耕に対して、狩猟採集の生活をしていました。狩猟採集をしていた人というのは、農耕生活をしている人から見たら非常に怖い人たちでもあったし、たくましい存在でもあった。農耕生活をするよりも、狩猟生活の方が、ずっと筋肉を鍛えなければいけない、山々を歩かなければいけないでしょう。おまけに、それぞれの瞬間の判断というのが、必要になってきます。

平安時代になり、役行者さんが、葛城から吉野まで橋を架けると命令したという説話が日本霊異記から後の説話集に載っています。橋を架けるというのは、実際に橋を架けるということではなく、文化的交流をしると命令したということになっています。そのときに命令されたのが、今葛城の山麓線ふもとに、一言主神社というのがありますが、一言主神だったと。その一言主神というのは、別の部分では、何事も一言、善事も一言、悪事も一言、何事も一言で判断してしまう神様だといわれています。一言で判断するというのは、瞬間的な判断が非常に優れていたということでしょう。それは、縄文人の代表ですよ。大和盆地の農耕社会に対して、一言主神社も、葛城山のふもとにあります。ふもとにいる人というのは、縄文的生活も併せて行われていた。そして、縄文的生活をする人は、瞬間的な判断をしなければいけなかった。そういう人は、我々と違う、特殊な能力を持っているんだと考えて、当然でしょう。そういうところから、修験道は始まっていると、私は考えています。

今、弥生生活になって、豊かな食料を手に入れることができた。生活が楽になったけれど、我々の基本的能力は、ああでなければならない。いつでも瞬間的に判断するような能力も持っていたはずであるから、それを維持しなければならないと考えるのも、普通のことだと思います。考えてみますと人間、新しい発見あるいは発明があって、新しい事実を取り入れると、それまでの能力がなくなってしまうということを何回も経験しています。文字が伝来されてから、記憶力が弱くなってきた。今の時代でいうと、テレビができてから文章を読まなくなったというのとよく似た話です。そういう中で、ちょっと前の時代、これは忘れてはいけない、持っていた方がいい能力だということにあこがれるということは、我々の宗教、修験道の基本的な考え方の中に、あったのではないかなと。その続きを我々がやっているんです。私は一昨日まで、大宮山に入り屋外修行をしていました。ただ

歩くだけの修行ですが、その中に、縄文人がこうしたであろうということを毎年ちょっとずつ感じることができる、それが吉野の宗教修験道なんです。

桜との関係の話に戻したいと思います。15年ほど前に吉野山の桜を守っている吉野山保勝会というところが、賛助会という後援組織を作ろうということになりました。レジュメをお配りしていますが、これはその時の設立趣意書なんです。これを読んでもらえれば、吉野の桜の歴史が大体分かるように思うということで、書かせていただいたものです。

最後に、歌を何首か並べてありますが、最後にあげさせてもらった歌「敷島の やまごころを人とはば 朝日ににほふ やまざくら花」本居宣長、61歳の自画像に描かれた歌です。日本人の精神というものを徹底的に究明しようとした本居宣長さん。だれかに日本人の精神というものを教えてくださいといわれたら、こういう言葉で表現したのでしょうか。ここでいう大和心は、戦前にいわれた軍人精神では決してありません。ここでいう大和心は、本居宣長さんのほかの研究などから考えれば、平安時代の「もののあはれ」であり、万葉の心であったはず、あるいは古事記の心であったはずです。日本人の心というのは、やまざくら花にきちんと表現されている、それをしっかり見ろということを行っているのではないのでしょうか。「もののあはれ」について話そうと思い、万葉の話になってしまいました。

最近、奈良県には、万葉文化館というのができました。飛鳥にあります万葉文化館で、中西進という万葉学者が、館長になりました。中西進先生とちょっと酒を飲んだときに、「平安文学における『もののあはれ』を万葉に当てはめたら、どんな言葉になりますか？」と聞いたことがあります。私は、何も自分の考えるところ言わずに人にものを聞くのは失礼ですから、「麗しいでしょうかね？」という表現で聞いたのです。「違う！」と即座におっしゃいました。何だと思えますか？「悲し」だと。万葉における、特に万葉の恋歌における、日本人の表象を代表する言葉は「悲し」であると、はっきりと一言で断言されました。「悲し」というのは、単に物事を見て自分の思うようにならなかったから悲しいという、あの悲しいとはちょっと違います。相手になりきったとき、胸を締め付けるようなきゅんとするような「悲し」だと。それが万葉の「悲し」だと説明してくれました。

また、坊主くさい話になりますが、同じ事をインド哲学の中村元先生にお尋ねしたことがあります。私は、学生時代に教えを請うた先生ですから、どんなことでも聞けるだろうということで、「仏教の神髄は何ですか？」と聞きました。先生は、「目の前の相手と一体になることだ」とはっきり言いました。しかし、本に書いてないのです。書いていないけれど、ずっと見てみれば、仏教の慈悲という言葉、慈しみと悲しみですよね。それを目の前の相手と一体化することだと教えてくれたんです。そうすれば、万葉の悲しと仏教の慈悲はつながってくるのです。

万葉集に載せられた歌で、仏教の影響を受けた歌というのは、ほとんどないでしょう。元々の日本人の素朴な感情、率直な感情を万葉は歌っています。特にこのような歌については、自分のきゅんと心を締め付けられるような感情を歌っているのが、万葉の特色です。

それが悲し。仏教の神髄は相手と一体になること。そして、それを仏教用語を使って言えば、慈悲の心だということになるのではないかと思います。

さて桜です。桜というものを取り上げてくれた、先ほどの話で言うと、弥生人の文化の伝統の中で、桜を取り上げてくれたのが紀貫之です。古今和歌集の序文に、竜田の紅葉と並べて、吉野の桜を歌枕の代表、歌の題材の代表として取り上げています。ただ、古今集には3首しか、吉野の桜をうたった歌は載っていません。紀貫之と紀友則と読み人知らず、それについてはレジュメに書いてあります。紀友則の歌を一つ例に出しています。「み吉野の山べに咲ける桜花 雪かとのみぞ あやまたれける」と詠まれました。吉野の山の桜を見ていると、雪と見間違ふようだと。そのぱらぱらと散っていく、桜の花を見て、万葉の「悲し」そして平安文化の「もののあはれ」を感じない人はいるのでしょうか。そこで、桜が日本文化と直結しているのです。私は決して話が上手な方ではないので、うまく理論的に説明することはできませんが、感じられるでしょう。

桜にもいろいろな種類があります。吉野の山の桜は、山桜です。大村市からお越しですが、さくらサミットで行かせていただいて、大村桜を見させていただきました。ものすごい。八重桜をもう一回八重にしたような桜でした。全く違いますが、すごい桜でした。

さて、蔵王権現の御神木として、桜の花をお供えするという伝統があれば、吉野の山の山桜だけが、今では蔵王権現の御神木だということになっています。しかし、本当にそういうのが自然なのかどうか。蔵王権現さんが、桜と一体化したものだと感じるのならば、全国から山伏さんたちが吉野に集まるとき、自分の郷土の一番いい桜を持ってこられても、不思議ではなかったはずです。ありがたい蔵王権現さんにお花をお供えする。山桜でなければいけないとは、あまり言わなかったのではないかと思います。桜をお供えするとは言ったでしょう。そうしたら、自分の自信のある桜を持ってきたに違いないと思うのです。大村からは、大村桜が吉野山に届けられても不思議ではなかったと思う。

そういうところに、小学校がありました。私もこの卒業生なのですが、宮坂敏和先生という先生が、私たちが小学生のころの校長先生でした。サクランボ拾いを始めた人です。そして、吉野を研究し、吉野の桜を一生懸命研究した方です。その宮坂先生が、吉野の山の桜を数えるといいました。種類を数えるといったって、山桜だけじゃないの？そのころ小学校6年生くらいの私にとっては、非常に奇妙に感じました。山桜は桜の本数に数えないんだと一方で言っていたのですが、一方で種類を数えるということで、その時、30種類くらい吉野に桜があるとされました。

おかしいじゃないか？ということになるのですが、それはいろいろなものの考え方の変遷の中で、桜を愛でる心というのも、我々は変化していると思います。桜であつたら良かった時代、そして、吉野の山桜でないと蔵王権現の御神木にならないという時代、あつても当然だろうと思います。今は、山桜が蔵王権現の御神木で、山桜以外はだめということになっています。

加盟自治体の皆様方にとっては、うちの桜の方がいいに決まっているということでしょう。



うが、桜全体のことを考えていくことが、さくらサミットの使命であろうし、自分のところの桜以外は、桜じゃないなどといったら会議が成り立たないですよ。そういう意味で、桜を愛する、あるいは、桜というものに特別な思いを持つということは、このサミットでないと表現できません。そういう意味で、我々吉野の桜を守るものにとってもさくらサミットというものは、非常にありがたいものだという風を感じております。

一昨年、岐阜県に招かれました。岐阜県から 2 自治体来てくださっていますが、ここではなくて、郡上市の青年会議所で桜の話をしろということで招かれて、行ってきました。郡上の桜がどんなものか、実は僕は知らなかったのですが、郡上八幡の近くに荘川桜というのがあります。ダムで水没するのを引き上げた桜です。桜を移植するくらい、何でそんなにたいそうなことかなと思って、一回見ておく必要があるだろうと思って見に行っただけですが、すごかったです。吉野では見られないような、あれは山桜ではないかな。吉野の山桜の寿命は、100 年が限度だろうということを我々は認識しています。あの荘川桜、100 年であの太さになるわけがない。すごい木が 3 本並んでいました。その内の 2 本が移植されたようです。

ところが荘川桜がある御母衣ダムというのは、現在町村合併で高山市なんですよ。郡上で話していたら、反発をかったような形になりまして、近くの別の自治体に含まれていることを言っただけで、反発される。それだけ、自分たちのものを大切にしているということになるのでしょうか。突然手を挙げられて、「あのくらいの桜なら、うちの寺にもあるよ。明日見に来てください」と。行ったら本当に、大きな桜があるのです。これも 100 年でこんな木になるわけがない。

またそのころ、桜というのは恐ろしいものであるから、丁寧に扱わなければいけないということを私はあちこちで言っていました。吉野の桜の衰退の最初の調査も、もっと丁寧に扱わなければいけない。それもそうなんです。桜というのは、本当に人間に楽しみを与えてくれますが、同時に放っておくとろくな事にならない。そういう意味では、街の桜というのは、本当にきれいですよね。いろいろな自治体にさくらサミットでお伺いしました。やっぱり、一番手入れが整っていたのは、北区さん。さすが東京だ、これだけの手入れができるんだと思いました。ソメイヨシノですが、テングス病なんて、一つもついていない。本当に花びらが、ぐっとのしかかってくるように、見事に咲いています。この辺の人は、千鳥ヶ淵の桜を見に行く人がいますが、飛鳥山公園まで奈良県から花を見に行く人は、あまりいないと思います。千鳥ヶ淵の話をする人を見たら、一回飛鳥山に行ってくださいと薦めています。

手入れをするということも、非常に大切です。手入れをする方法について、誤ってはいけない。相手も人間と同じように、さっき言いました仏教の神髄、慈悲の心、桜と一体化した心で桜に接していかなければ、桜をきちんと守っていくことはできないと私は信じるようになりまして。そして、桜をじっくり眺め、じっくり考えていくと、日本の心が必ず分かってきます。日本人の心、我々は今、忘れかけているのではないのでしょうか。田中執

務長の昨日の話にも、そういうことがちょこっとあったのではないのでしょうか。

桜を本当に自分と同じように育てようという気になれば、我々の国も、まだまだ捨てたものではないと。それは、日本人の心の原点に返ることであり、これから先のエネルギーを蓄えることにもなっていくと、私は信じます。

全く話は途中ですが、10分までに終わってくださいといわれておりますので、私の話はこれまでとさせていただきます。皆様方に、またお話しさせていただく機会ができることを楽しみにしております。大変ありがとうございます。

今日は大和高田市長と大和郡山市長がいらっしゃっています。高田、郡山というのは、みんな大和がついているんです。大和高田、大和郡山。ついていない方の高田、郡山よりも、ずっと先に奈良県の高田郡山はあったはずですよ。昨日、飲んだ拍子に山形の蔵王の話をしていました。蔵王権現を勧請したから蔵王権現という山になった。しかし、蔵王にお参りに行ってくるといったら、吉野に来るといって風には判断する人は、日本中のだれもが思わないでしょう。それでも吉野は、日本人の心を守り続けますということを最後に言いまして、話を終わりたいと思います。

御静聴ありがとうございました。

## 報告「地域で守る千年の桜」

財団法人吉野山保勝会・桜調査チーム事務局長 小島玉雄

皆様おはようございます。桜調査チーム事務局長の小島です。

では早速、「世界遺産吉野山の景観と保全 地域で守る千年の桜 調査とこれからの保全活動」と題し、お話しさせていただきたいと思います。

皆さん御承知の通り、吉野山は山桜で野生種です。野生種、山桜というものは、日本全国植わっておりますが、これ以外に何百種類とある栽培品種の作出親、つまり山桜から沢山の桜が生まれたと。これは自然交配し、種から育っていくものですから、そういった育ち方をしたものと人工的に作られたものが沢山ございます。

皆様がよく御存じなのは、ソメイヨシノです。ソメイヨシノの話は、皆さん何回もお聞きになっているので、簡潔明瞭に申し上げますが、ちょうど江戸の末期に貝原益軒が、吉野山の桜のガイドブックのようなものを作りました。そのころから、一般庶民がたくさん吉野山を訪れるようになり、いろいろな説があるのですが、ちょうどそのころに江戸の方で「ヨシノザクラ」ということで、売りに出されたと。そういう記録から行くと、商売上手な方が「ヨシノザクラ」とつけて、それから余りにもそれではいけないだろうということで、学術的にソメイヨシノと名付けられたものです。あてやかに咲くものですから、今は日本全国に植わっているものです。

今回、私ども吉野山桜調査チームを結成させていただいた経緯を簡単に御説明させていただきます。平成 20 年 5 月に財団法人吉野山保勝会様から、調査の依頼を受けました。この約 50 ヘクタールの規模になりますと、国、又は県、町といったところから依頼を受けるのが通常なのですが、民間の皆様からの御依頼でした。この背景には、その 2 箇月前に NHK さんから突然、吉野山の桜を見てもらえないかという御依頼が私の方にあり、それから一つの番組ができて、それを御覧になられた方が沢山いると思うのですが、そこから始まりました。

その当時、依頼内容として、ウメノキゴケの着生がひどいと。それからナラタケ属菌、これはキノコです。食べたらおいしいのです。東北の方は、よく召し上がっておられると思います。それから、若木の枯死が増えてきたということでした。それから、実際調査に入ってからよく見受けられますが、倒木です。ある日突然、お天気なのにバタッと倒れるというようなことが、起きてきました。

そのような中で、私が事務局長をしている吉野山桜調査チームというのは、元々この調査のために結成されたチームではなく、民家の樹木の再生・診断を専門にしている会社を運営しています。こちらにあるように、京都大学の森本幸裕教授、京都菌類研究所の山中勝次先生といった方々と、研究会又はNPO等で、約15年ほど前から、様々な桜の研究を行っておりました。今回、そのチームで吉野を調査させていただこうということで、始まりました。

最初は3月でお花の咲いていない時期に見に行ったものですから、これは咲いている時期に見に行かないといけないなということで、見に行ってきました。いわゆる「枯れ下がり」という現象です。上からどんどん枯れていく、それが急激に進んでいる。実際におかしいというので見に行ったのですが、その通りで、花はついています。枯れ枝が多いという状態でした。

それから、ウメノキゴケです。ウメノキゴケはコケではなくて地衣類です。地衣類というのは菌類の仲間、藻類と共生します。空気がきれいなところに生息するもので、こういった木々とか岩石ですとか、いろいろなところによく着生します。

最初この状態を見たとき、がい骨だという風におっしゃる方もいましたが、花がついていないときに本当に真っ白けなんです。よくよく調べてみますと、芽の上までかぶっているという状態でした。それを枝の肥大生長量とウメノキゴケの生長量、どれだけ成長するかということ調べましたところ、基本的に健全に伸びている枝葉にはついていないんです。で、枯れてしまったり、弱って成長が遅れている枝についているということが分かりました。ですから、これが直接的に桜を枯れさせているわけではないと。つまり、結果として着生しているというようなことを現状では判断しています。ただ、ここから詳細に調べていくと、この着生による影響、かぎ爪のようについで、そこから物質が出てきますから、そういった影響があるやもしれぬということにはございます。

これが、一番言われておりましたナラタケモドキというキノコです。これも調べました。これは、後ほど詳しくお話ししますが、こんなキノコが木の根っこから出てきます。

今までお話しの中にもありましたように、桜の木々があり、何度か国の施策、あるいは調査は施されておりました。

今回の調査は何を目指そうかということで、議論しました。まず、ある日突然降っていったように、調査の御依頼をいただきましたので、どこから手をつけるかというのも、雲をつかむようなお話だったのですが、まず最初に困ったのは、過去のデータが全くないと

ということです。気象のデータもなければ、いつ、どこに、どんな桜を植えたのかという記録もないという状態でしたので、まずは、現状把握をしましょうということでした。

吉野山の桜の衰退状況と、それから衰退原因の究明です。目標としては、1本1本というのもテーマとしてあげておりますが、この50ヘクタールの景観をいかに継続させていくか。つまり寿命がありますので、更新もしていかなければなりません。御神木ですので、生きているものを切るわけにはいかない。そういった中で、どうやって更新していけばいいのか。更には、今回産学合同の調査チームで、技術者と研究者という幅広い知見で調査に入ることですので、調査の結果を学術的データとして蓄積して、将来にわたって役立つようにしましょうと、つまり、記録として役立つようにしましょうというようなことをテーマにしました。

少し吉野山について、簡単にお話しさせていただきます。御承知のように奈良県の真ん中にございます。吉野山というのは、紀伊半島を東西に横断する中央構造線、いわゆる日本の屋台骨といわれるところの断層帯にあって、急峻な地形なのです。ですから、一口に吉野山といっても、場所によっては、母岩といって、土壌の下の岩石の種類ですとか向きが、隆起して縦に向いてたり横に向いていたり、様々な条件がございます。気候は、奈良盆地と紀伊山地の中間的な特徴で、一般的に湿潤といわれていますが、一つポイントとしては雲霧、霧が発生しやすく、これがものすごく吉野特有の環境条件になっているだろうと。それがいろいろな症状を引き起こしたり、または、それが吉野山の山桜を生育させている要因になっている可能性があるということ、これらは、都市部に見られる桜の衰退、あるいは桜の生育条件とは全く異なる条件であると。そういったところから、調査の具体的な内容を決め、進めて参りました。

50ヘクタール、奥千本から近鉄の吉野駅まで、北向きに開けた谷の両サイドに桜が植わっております。こういう地形ですので、簡単に雲霧が発生します。都市部の桜の衰退として、町中のソメイヨシノを管理されて、枝が上から枯れてどうしようとお困りの方もいらっしゃるかと思いますが、それは水ストレスといひまして、いわゆる乾燥です。ヒートアイランド現象とか、そういったものも影響しているのですが、吉野の場合、雲霧が水分を適度に葉っぱに供給しているものですから、先ほどのウメノキゴケが目にも覆いかぶさっていても、ちゃんと葉がつくということになっているのではないかと考えております。

それが結果として、世界で…。世界でといっちはだめなんですね。日本で唯一の環境を作っております。つまり、山桜というのは、普通独立木で、山の中にぽつぽつとあるのが、

通常の風景です。それが、密植されて、普通であればそれが原因で弱っていますということになるのですが、案外とよく育っているんです。樹高が約 20m 以上を越える桜が密植している中にあります。ただ、肥大生長量が非常に少なく、毎年の成長が少ない。この桜、普通に見れば樹齢 50 年とか 60 年くらいに見えますが、100 年を越えているのです。尾根筋の桜などですと、恐らく 150 年を越えているようなものもあるというもので、この密植でも育っているということが、吉野山の大きな特徴です。

この山桜をどう調べていこうかという探索マップを作りました。大体桜が枯れるというのは、その前にまず衰弱があります。その手前に養分が足らなかつたり、日照が不足したり、あるいは水が足らなかつたり、多すぎたりと、そのトリガー（引き金）となる問題があると。それを一つひとつ、つぶしていきました。その中に、衰弱を更に進める要因として、ウメノキゴケとかナラタケとか、そういったものがあるのではないかとということで進めて参りました。

これらの中で、ポイントとしていくつか簡単な項目を切り取っておきます。何百項目と調べているのですが、まず植栽環境。斜面の方位ですとか日照条件。それから水分土壌条件、それから団地というのは、ひとかたまりの植栽値ですね。その樹齢構成。これは切り株を元に調べていきました。それから、個体の生長量。それから、衰退時期の推定ですね。これは年輪計測という方法で調べております。過去の状況を探り、いろいろな方向性、いろいろな角度で調査しています。

桜が衰退していると言で簡単によく言われますが、専門的に言いますと、衰退というのは何を以てして衰退かと、根拠がはっきりしていないケースが多いのです。枯れているから衰退しているといわれているようなケースが、非常に多いのです。いろいろ細かく、様々な技術を使って調べますと、葉っぱが少ないから衰退していると診断されている個体でも、実は、人間でも同じように、体の弱い方はそれなりの生活をして、アスリートはそれなりの生活をするというのがあると思います。同じように、葉っぱが少ない状態が、その桜にとってはちょうどいい状況というケースもあります。吉野の場合、桜の衰退というのはどのレベルを言うのか調べようということで、調査を進めております。

言葉で言うより、写真で見ていただいた方が分かりやすいと思います。まず、何もデータがないので、気象観測。昔でいう百葉箱を設置し、365 日気象データを取っております。それと平行し、樹木というのは値から水を吸うというよりも、葉っぱの蒸散の時に上から下の水を引き上げるんですけど、そのスピードを測る樹液量計測。

それから光合成。光合成というのが養分を作って根を作って、それから枝を作ってというポイントになるのですが、そういった葉緑素の計測。

それからナラタケ感染木の調査です。従来、ナラタケ病といわれていまして、ナラタケ病はイニシャルアタッカーといわれており、攻撃して桜を枯らすといわれています。

これは、大きな根っこの樹皮をめくったところです。白いのがナラタケのキノコの菌糸です。これは形成層といって、水が通る真上の部分です。そこをずーっと根の先端から上がって行って幹まで行くと、キノコがぼこぼこ出てきて、その時には、全体の根がほとんどやられて枯れてしまうというものです。ですから、イニシャルアタッカー、これが枯らせる原因だといわれています。

それを調査する方法というのが、確立されておりました。ナラタケ属菌というのは、光るんです。超高感度の微弱発光計数という機器を使って、発光の有無を持って感染の有無を調べるという方法を確立しました。それで調べますと、感染木の隣に未感染木があるわけです。20年以上前からナラタケの被害を受けているという、その被害を受けて感染した桜の横に、元気な桜が感染せずに残っているということが分かってきました。ナラタケがついたというのは、最初は、何か別の要因で根っこが弱って、結果としてナラタケが入ったと。ですから衰退のシグナルとしては、ナラタケもどきというのは非常に重要なポイントではないか、というように判断しております。

それから、桜というのは、見た目と実際が偉く違うものです。これは非破壊の幹の内観診断で、内部が41%空洞になっています。音波の測定でCTスキャンみたいなものです。でも、これだけ青々と葉っぱをつけている。つまり水が通る道がしっかり確保されていれば、桜というのはこういう状態でも育つという一つの事例です。

こういったいろいろな機材、それ以外の機材も使って調査すると共に、過去との比較。記録がないものですから、写真を頼りに比較しています。これは、昭和41年の上千本あたりで、割と桜も密度が薄くて、畑が山の中に残っている状態です。

こちらが2008年の状態です。もう桜がかなりを締めて、杉、檜が植わって、植栽密度がかなり上がっている状態です。こういったものから、密度がどう変遷するかというのを調べています。

それから、過去の調査結果の再検討ということで、GISといひまして、地理情報システム。これはソフトがあって、いろいろデータを入れ込んでいきます。

これは昔、奈良県さんが非常に御苦労されて調査した結果をデータ化したのですが、緑

色が良好で赤が不良ということで、こういった情報を重ねていくことによって、立体的に桜の状況がわかる。現代では、更にこれをもっと高精細にする技術があります。今、基金を集めていただいたり、いろいろな企業さんの支援ですとか、吉野町さんでも補助金の申請を御検討していただいているのですが、そういった基礎台帳になる地図を作っていく。それを元に、これからの指針と管理方法を再構築していこうという取組を進めております。

今回の調査のとりまとめに向けてということで、平成 20 年から 3 年間、まず現状把握の調査をしましょうということで、区切りの来春に説明会を予定しています。そのためのデータの分析を今一生懸命やっているところです。ここでポイントが一つありまして、調査結果を書類として出すだけではなく、現実的な対策。よくあるのが、土壌を改良しましょうとか、肥料を入れましょうとか、そういうことなんですけど、50 ヘクタールの山に土壌を改良して肥料を入れましょうというのは、非現実的な対策です。実際土壌を調べてみると、そんなに肥料不足でもなかったです。ですから、より現実的なものを提案していこうと。先ほどお話がございましたように、献木なんかで、山桜とは異なる桜が入ってきています。自然交配しますから、全く違う桜ができる可能性があります。ですから、これからまた次の 1000 年を考えますと、この段階で、この山桜の山として残そうということであれば、食い止めていかなければいけないということです。

それから、これはどの自治体さんでもテーマになっていると思いますが、健全な苗の育苗。特に種から苗を育てますから、そういったものもしていかなければいけないと。吉野山の場合は、鹿が食害をいたしますので、それを考慮しなければいけないということです。

調査と平行して、3 年間じっと我慢してくださいというわけに行きませんので、定期的に報告会とか、いろいろなワークショップとか、サクランボ拾い。これは、北岡町長のリードで進めていただいております。それから、桜の学校研究拠点というようなものをこの場所に設置しています。具体的に、こういうサクランボ拾いや、これは保勝会の方に桜の見方。いわゆる吉野山の場合、この桜をどう評価するのかというような見方をお話ししてもらっているところです。

それから、住民説明会ですね。

更には、この世襲山の特殊な環境状況の中で育った、1300 年山桜が持続されてきた。これが、世界の今年は生物多様性年なのですが、その中においても非常に先進的な事例であると。1300 年というのは、さすがに世界各国を探してもありません。それをこのウルピオ、これは都市の生物の多様性とデザインという COP10 というのが秋に愛知県の方であります。



す。その都市の国際会議なのですが、そこで大和ハウスさんの御協力もいただいて、学術発表いたしました。そこで学術指揮者、研究者に吉野の現状を訴えてきました。

それから、グリーンウエーブという国連のこれも生物多様性に関係している、5月22日10時に世界中で一斉に植樹をしましょうというイベントです。これは、環境省さんの御支援をちょうだいしまして、地域の住民さん、吉野の高等学校さんですとか、大和ハウスさん、読売新聞大阪本社さんなど、いろいろな桜を守る会の会員の方々とか、地域の方々と御一緒に、植樹と先ほど申し上げた、きちんとした苗を育てる育苗のためのワークショップを同時開催いたしました。

これから必要なこと。これは皆様自治体の方々、同じようなことになってくるのかと思いますが、国、県、町、それから地域住民。私も京都の観光地のど真ん中におりますから、土日は車が出せないと、迷惑を受けるよという感覚は、当然あります。だけれども、それが、この街の活性化につながっているという理解もしているのですが、そういったものを共有して、街の財産をみんなで守っていきましょうという意識付け。それから企業さんですとか、一般の支援者との連携ですね。

特に吉野というのは、建物が吉野建てとあって、3階が1階で、下におりていってという構造の建物が多いのですが、社会性や日本の芸術に大きな影響を与えています。そういった地域を保全するというのは、単なる桜の名所を守るということとは、また少し意味が違うと。そういう視点で取り組んでいく必要がある。ただ、慢性的に管理予算と人材不足があるので、その解消が必要です。

それに、私どもがお役に立てるということで、景観保全の管理方法の指針と仕組み作りを御提案しよう。それから吉野式の管理方法の構築と、管理記録をきちんと取っていただくということ。それから育苗システムの構築です。更に今、準備を進めておりますが、小さなお子さんから、大人、一般の社会人の方、更には、私どものようなプロまでの人たちが、それぞれ関われるスキームを作って、そのスキームプログラムに乗ってもらって、人材育成をしていこうというようなことを調査チームのノウハウを活用して、進めていこうとしています。

ちょっと時間がないのですが、参考でそういうことが現実的にできるという事例を御紹介しておきたいと思います。これは弊社で見ている桜ですが、1984年、上から枯れ下がりました。これはエドヒガンのしだれ桜です。樹齢、現時点で約400年といわれています。これは放って置いたら、どんどん上から枯れてなくなっていたわけです。26年ほど前です。

それをきちんと処理してあげると、きれいに咲きます。去年あたりから1本桜ってよく雑誌が出ますよね。そういうものにもよく掲載していただくようになりました。現実的には、左の写真を見ていただくと分かるように、V字型に大きな幹がありますが、両方ガラン洞です。だけれども、適切な処理を施すと維持管理できます。

そのポイントが、スキーム作りの原点になりますが、「桜を切るばか梅切らぬばか」という言葉がありますが、桜というのはよく切ってあげた方がいいのです。弘前の小林樹木医さんと共に1990年代、一緒に弘前城の公園で取り組みましたが、適切な位置で切って保護材を塗ってやると、きちんと巻き込んでいきます。

宣伝するつもりではないのですが、これは弊社が開発したわさびを使った塗布剤です。殺菌剤とか癒合剤とは異なり、巻き込みが早くて、巻き込むと塗ったところの被膜を形成しているところが全部はがれてしまいます。ですから、内側に剤を巻き込まないというものです。ですから完全に傷口がきれいになくなるというものです。

これは天台座主が比叡山の天台宗ですが、お忍びで来られる桜なんです、横10m、縦7~8mくらいのしだれ桜です。これは内部をアップにした状態ですが、剤は完全に失われて、いわゆる外側の外樹脂と、形成層。いわゆる水が流れているところだけしか残っていない。ただ、これでも通道といいまして水が流れる道をきちんと保護してあげるだけで、それをとぎらせないようにするだけで、別に埋め物をしたり、硬化剤を使ったり、肥料を入れなくても、ずっと育っていています。このような技術を子供からプロまで普及させることによって、それぞれのパーツパーツでできることがありますので、この50ヘクタールの桜を守っていけるだろうと。それを一生懸命考えているところです。それを御提案申し上げ、とにかく低コストで、効率的、効果的に、吉野山の桜が保全できるように、進めております。

そういうことをコツコツと続けておりますと、先ほど全体を見ていただいた大きな枝の桜の内部なんです、この桜の内部もガラン洞なんです。ただ、この赤い丸をつけたところを見ていただいたらお分かりの通り、ドーナツ状に開口しているところが巻いていますが、これは癒合形成して傷口をふさいでいるところです。

腐朽菌というのは、生きている細胞を攻撃しにくいです。ほとんどの腐朽菌は、こういう癒合形成をさせてしまうと、そこでそれ以上進行しません。ですから、そうしてやると、ここは細胞分裂が活発化しますから、新しい枝が出てきます。ですから、施肥をしなくても、こういうきちんとしたせん定処理を適切にすることによって、それだけでも、桜は再

生できるという事例です。そういう技術を活用していこうということで、全体の指針を作りながら、この小さな個体の管理まで、逆ピラミッド型のような形が、最終的に御提案できればということで進めております。

少しオーバーしましたが、御静聴ありがとうございました。

## サミット全体会議

コーディネーター : 篠田 伸夫 氏

パネリスト : 酒井 芳秀 氏 (北海道新ひだか町・町長)  
: 門脇 光浩 氏 (秋田県仙北市・市長)  
: 庄司 勝久 氏 (茨城県日立市・財政部長)  
: 飯窪 英一 氏 (東京都北区・地域振興部副参事)  
: 大熊 秀敏 氏 (岐阜県本巣市・産業経済課長)  
: 金武 祐司 氏 (岐阜県各務原市・水と緑推進課長)  
: 久保 一雄 氏 (長崎県大村市・副市長)  
: 北岡 篤 氏 (奈良県吉野町・町長)

オブザーバー : 福井 良盟 氏

: 小島 玉雄 氏

アドバイザー : 黒坂 登 氏 (秋田県仙北市・さくらアドバイザー)

篠田 : 皆様おはようございます。コーディネーターを務めます、篠田です。

先ほど福井先生から荘川桜の御紹介がありましたが、岐阜の荘川桜は、樹齡が確か 400 年のはずです。100 年では済まないよというのは当たり前で、400 年ですから、本当にすごい立派な桜です。

さて、私は、このコーディネーターを「第 10 回さくらサミット in 北区」のときから務めております。毎回お呼びいただき、大変ありがとうございます。一応、このさくらサミットの経緯と趣旨について、若干御説明申し上げたいと思います。

冒頭、町長さんからお話しがありましたが、さくらサミットは今回で第 19 回目になります。このさくらサミットというのは、桜による町おこし・村おこしに熱心に取り組んでいらっしゃる市町村長の皆様が、肝心なところは次ですが、現地に集まり、一緒になって勉強しようという会です。昨日も、懇親会で「現地主義」という言葉を使いましたが、現地に集まって現場の桜を見る、あるいは、現場での取組みを見るというのが、非常に重要なポイントです。私も毎回出席させていただいて、現地の住民の方、あるいは現地の御婦

人のお作りになった料理を食べながら話をするというようなことをやって参りまして、非常にこの点が、このサミットの特色でありメリットかなと思っております。

第1回は、昭和63年に開催されました。昭和の末年でしたが、鳥根県の木次町、現在は合併して雲南市となっておりますが、そちらで開催されました。ちょうど総合計画を作っているときに、桜による町おこしをやっている団体に声をかけたところ、大変多くの自治体が集まり、第1回のサミットが行われました。今年は、そこから数えますと、22年目にあたります。大変長い間、切れ目なしに継続しており、これは本当に素晴らしいことだと思います。

継続は力なりといいますが、実は、継続するためには、継続していこうという情熱がないと不可能です。今日お集まりの市町村長の皆様は、その継続していこうという情熱、それから桜に対する大変熱い愛情をお持ちの方々ばかりです。特にその中で、この吉野町さんは一番と言っていいくらい情熱の固まりで、このさくらサミットが開催されて、1回も欠席されておられません。皆勤賞です。それ故に、福井前町長さんには感謝状を贈ったわけですが、素晴らしい情熱の持ち主です。先ほどもございましたが平成6年に第6回目を開催して頂いておりますから、今日は2巡目に開催して頂いたという状況です。

それでは、全体会議に入りたいと思います。今回のテーマは「未来へ！桜を守り育てよう」ということですが、それだけだとちょっと抽象的だということになりますので、二つのテーマに分けて、議論をしていこうということになっております。最初のテーマが、「桜を次世代に伝える」というものです。これに、多くの時間を使いたいなと思っております。それから二つ目ですが、若干趣を異にいたしますが、「今後のさくらサミットのあり方について」、議論していただくつもりです。

実は、冒頭にもございましたが、現在、加盟自治体の数は21を数えています。数としては21という数字ですが、実は平成の大合併が行われ、それを境にサミットに実際参加していただける自治体の数が、10団体前後になっております。今日も残念ながら8団体ですが、こういう事で本当にいいのかなど。桜に対する愛情が大変深い方々だと申し上げましたが、恐らく他の団体についても、その点については、人後に落ちないと思いますが、これでいいのか。今後のあり方を検討していく時期にさしかかっているのではないかということで、この点について後ほど取り上げてみたいと思います。

では、メインテーマである「桜を次世代に伝える」の進め方についてまず御説明します。

最初は、各自治体さんから、我がまちの桜の現状と守り育てるための方策について、3分以内で発表いただきたいと思います。3分というのは、本当に短いのであつという間ですが、ここで長々とやられますと後に支障を来しますので、エッセンスだけに留めていただき、御協力いただきたいと思います。

その発表を受け、問題点を掘り下げていきたいと考えております。第一の視点が、桜の文化、保護・育成の技、手法といったものをどのような取組みによって継承しているのか、あるいは、市民の皆さんとどのように協働しているのか、そういう視点からえぐってきたい。もう一つの視点は、特に子どもたちに向けて、どのように桜の文化や保護・育成の手法を伝承しようとしているのか。この二つの視点をクロスさせながら、話を展開していきたいと思っております。

では、最初に各自治体の発表です。これは便宜上、北から順に行きたいと思しますので、まず最初に、北海道新ひだか町さん、よろしくお願いいたします。

酒井：先ほど御紹介いただきました、町長の酒井です。新ひだか町につきましては、こういうネーミングになっておりますが、合併町です。旧静内町と旧三石町が合併し、約人口2万6000人弱のまちです。まちの紹介につきましては、皆さんからすると左手のポスターの下にパンフレットがありますので、御関心のある方は、お持ち帰りいただければと思います。

私のまちの二十間道路桜並木。一間は、1m80cmですが、二十間ですから、36mの道幅に、桜が一直線に7km植わっております。この桜は、道路は明治時代に行啓道路として作られたのですが、その両サイドに、大正5年から3年間くらいかけて、近所の山桜を採取して植えたということですので、ちょうど1915年くらいですから、例えば、樹齢5年くらいの物を植えますと、今年でちょうど100年というような古木がかなりございます。ただ、歴史の厚さでいうと吉野町さんのように平城遷都1300年とか、こういった本州、四国、九州各地の歴史と比べると10分の1くらいのスケールでして、桜の名所としては若いです。ただ、北海道遺産、日本の道百選、さくらの名所100選に選ばれており、直線で7kmというのは、私は日本一ではなくて世界一だと言っています。

皆さんのお手元のプログラム8ページに写真が出ておりますが、ちょうどその写真でいうと左手に自転車道がついており、その間に秋になりますと静内農業高等学校の生徒たちが、秋の桜、すなわちコスモスを1万5000本くらい植えて、秋はコスモスを楽しみにし

ております。

それで、この桜の保全維持のため、しずないさくらの会という会が、11年前の平成11年に設立され、今会員が個人・法人を合わせて、約200くらいです。個人会員で年額5000円くらいの御寄付をお願いし、毎年100万円くらいわが町の桜振興基金に積んでいただいております。この累計が、約1330万ということで、町でも一般会計の予算で、桜保全のために年間数百万投入していますが、そういったボランティア的な発想の中で、その人たちは、お金ばかりでなくて、いろいろな桜保全のための活動をしていただいております。

それから、静内農業高等学校の生徒さんには、桜並木のそばに高校があるものですから、大変御関心をいただいて、プロジェクトチームを作って、桜の樹木調査等を行っていたり、ボランティア活動をしていただいたりしております。それから種子の採取ですね。種を拾って苗木作りというようなこともやられております。以上です。

篠田：はい、大変簡潔に、ありがとうございました。それでは、秋田県仙北市さんお願いいたします。

門脇：はい、秋田県仙北市の門脇と申します。仙北市、旧町村でいうと、秋田県角館町、田沢湖町、西木村の3町村の合併でできました。角館町は、武家屋敷と桜がとても有名です。田沢湖町は日本一の深さを誇る田沢湖、そして、秋田県一の標高を持つ秋田駒ヶ岳。西木村は純農村地帯です。この三つが合併してできました。

市のコンセンサスとして、所得の確保に今、一番重点を置いています。秋田県は非常に所得が低いところですが、更に、その中でも仙北市は25市町村中22番目という低さです。ですので、観光産業に特化しているという現状があります。この観光産業でたくさん素材があるとしても、桜、花というのは、大きな素材になっています。年間600万人くらいの観光客がおいでになりますが、その約25~30%くらいは、春の一時期の桜の観光客で賑わうという状況があります。ですので、桜を守るということは、すなわち郷土を愛すること。そして、自分たちの生活を守るという上からも、非常に重要なテーマになっています。

どんな取組みをしているかというのと、例えば、地元角館の小学校の子どもたちは、4年生の時に桜と武家屋敷の案内をするというボランティア活動をしています。歴史案内人という方々もいまして、その方々は、武家屋敷を中心に行っていますが、その中に混じって、子どもたちが桜の様々な説明もしてくれているという状況があります。また、角館中学校

2年の子どもたちは、ソメイヨシノがたくさん植わっていますが、その桧木内川堤の手入れをしてくれています。160本くらいの桜を選び出し、その周辺に3箇所くらい穴を開けて、そこに施肥をする。これは23年くらい続けている、そういう地域の取組みがありません。

役所としては、平成22年4月から桜係というものを設置いたしました。今日も桜係のメンバーが来ています。桜が文化財に指定されていますので、教育委員会の文化財課の中の桜係という位置づけになっています。秋田県は、平成21年に水と緑の森作り税というものをスタートさせましたが、その関係の基金の活用なども考えているところです。以上です。

篠田：はい、ありがとうございました。それでは、茨城源日立市さんお願いします。

庄司：日立市の庄司と申します。どうぞよろしく願いいたします。日立市について、御説明申し上げます。

御存じのように日立市は、かの有名な日立製作所の工場のある町で、日立の桜というのは、まちの歴史と切っても切れない結びつきがあるものです。日立市では、明治の末から大正にかけ、銅の精錬をする日立鉱山という鉱山がありました。今のジャパンエナジーの前身の会社です。この鉱山の煙害で山々の木々が枯れてしまい、その対策のためということで、まず東洋一といわれる大煙突を作り、煙を高層に拡散するという事業を行いました。更に、野山の緑を回復するために、煙害に強い大島桜の苗木を植えたというのが、桜が町の花になった始まりです。その後、企業や市民の手により、大島桜を台木として育てましたソメイヨシノを市街地に植え、それが今の平和通り、かみね公園に代表される、桜の名所になりました。

ところが、先ほどからお話しがありますように、当時植栽された桜が、老木化しまして、テングス病を元とした問題が発生するなど、大変厳しい状況になってきております。特に、市街地に植わっている桜であり、ソメイヨシノということもありまして、テングス病に対する対策が急務となっております。現在では、罹患した枝の伐採の取組みを進めているところで、そのほか、桜を守り育てるというための方策として、企業や団体の協力を得まして、桜の植え替えをする「桜パートナー事業」。環境をテーマとして、100年後に山一体を桜で埋めつくそうという「桜の山作り事業」。更には、市民が地域の桜を守り育てるとい



ことで、その人材を育てる「桜守事業」というを進めているところです。

平成 18 年には、日立固有の品種と認定を受けた、日立紅寒桜がございまして、これらの育成・植栽を進めています。この桜は、淡い紫がかったピンク色をしておりまして、早咲きで開花期間が長く、1月の末ごろから3月くらいまで花を楽しめるという特徴があります。この日立紅寒桜を中心に、平和通りとかみね公園のソメイヨシノ。それから、大学通りという市道がございまして、ここに植えられている八重桜。そういう冬の間から5月初めくらいまで桜を楽しめるというのが特徴になっております。こういったことを今後まちづくりに大いに活用していきたいということで、桜を今後とも守り育てていきたい、先ほどの御講演にもありましたように、桜の身になって、相手の身になって桜を育てるといふことで、進めていきたいと思っております。

今後とも、皆さんと連携して、交流を深めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

篠田：ありがとうございます。では、東京都北区さんお願ひします。

飯窪：東京都北区から参りました飯窪です。どうぞよろしくお願ひいたします。

東京の北区は、東京の北にありまして、正に北の玄関という紹介をいつもさせていただいておるところです。北区におきまして、区外の方から北区に来ていただいて、地域の活性化を起こしていこうということで、観光振興を務めているところです。

その中で桜は、数少ない観光資源の一つとして、北区をPRする資源として活用しているところです。この桜ですが、北区で御紹介させていただくのは飛鳥山の桜になります。昨日も、金峯山寺の田中執行長さんの講話の中でも御紹介がありましたし、先ほども福井住職さんの御紹介もありましたとおり、全国区になっているんだなと、とてもうれしく思います。

改めて飛鳥山の桜について、御紹介させていただきたいと思っております。江戸時代から観光の名所として名高い飛鳥山です。江戸8代将軍徳川吉宗が、280年前、享保の改革で江戸っ子たちの行楽の地として解放するため、将軍自らが宴席を設け、名所としてPRしたのが始めです。江戸時代の最初の名所で禁止されていたお酒や仮装を認め、飛鳥山は庶民の桜の名所として親しまれてきました。飛鳥山を題材とした浮世絵など、たびたび取り上げられており、現在はソメイヨシノ、佐藤桜など約650本が植えられています。

「アスカルゴ」という乗り物がありまして、飛鳥山とエスカルゴを重ねて、「アスカルゴ」という愛称です。飛鳥山という名前の通り、標高 24m ほどの山です。東京一低い山として売り出していきたいのですが、やはり山ということで階段を上らないといけないことになっています。北区では高齢人口が多いこと、あるいは子育て世代に対しての配慮ということで、2 分間の乗り物ですが、モノレールを設置させていただきました。これが、花見の時には、2 分間ですが、20 分以上待たなければ乗れないという状況です。

桜を守り育てるということですが、北区では飛鳥山の公園や道路の街路樹、あるいは河川敷に沿った桜など、管理が行政ということで明確になっているところです。なので、一義的には行政が桜の管理を行っています。地元の方々に、桜ということではございませんが、花を育てる、あるいは植えるということで活動されているということはあるのですが、その点からまたボランティアの育成等も始まっていくのかなと思っていますところです。

篠田：ありがとうございました。それでは、岐阜県本巣市さんお願いします。

大熊：岐阜県の本巣市は、平成 16 年 2 月に、本巣町、糸貫町、真正町、根尾村、4 つの町村が合併して、できたまちです。岐阜市の西側に隣接しており、岐阜市内までは 20 分あれば行けるというところに、位置しております。

今日、御紹介させていただきます淡墨桜は、ちょっとほかのところとは違って、1 本桜で、根尾谷淡墨桜と申しまして、エドヒガン桜です。樹齢が 1500 年余りということで、第 26 代の継体天皇がお隠れになっており、都に戻られる際に、お手入れをされたと言い伝えられている桜です。樹高が 16m ほど、根回りが 10m ほどございます。枝張りの幅が 26~27m ということで、大変大きな桜です。明治時代から保存はされておりましたが、昭和 23 年に、あと 3 年くらいで枯れてしまうのではないかとということがありまして、昭和 24 年に 238 本の根次を行い、今現在復活してきまして、毎年花を咲かせてくれている状況です。

現在の保存の状況としましては、本巣市在住の樹木医でありますアサノ先生という方に御指導いただき、淡墨桜の受精を最優先にした保存を行っているところです。以上です。

篠田：ありがとうございました。それでは、同じく岐阜県各務原市お願いします。

金武：各務原市の金武と申します。よろしく願いいたします。各務原市は、岐阜県で一番南にあります。ですから、木曽川を挟み、愛知県と隣接する都市です。

我々も本巣市さんとか、こちらの吉野町さんのように歴史があるようなわけではないのですが、新境川堤百十郎桜というのが、市民の誇りになっています。これは、歌舞伎役者の市川百十郎さんという方が地元出身で、その方に苗木を寄付していただいたというのが、昭和初期の始まりで、その名前がついて百十郎桜と命名しております。

我々のまちには、この百十郎桜と、近くに市民公園があります。そこで毎年4月の第1土曜日・日曜日に、桜祭り20万人の広場という市内最大のイベントを開催しています。

この川と街というのが、最近是非常に結びつきが少なくなりました。市民からどのような意見が出るか楽しみにしておりまして、川の回廊アクションプログラムというものを策定し、市民の意見をお聞きしました。まず、川をずっと一緒に歩かして、それからワークショップを行いました。市民の大多数の意見は、この桜をつなぎたい。各務原市を一周させたいというのが非常に多い意見でしたので、この桜回廊都市計画という発表をさせていただきました。全部で39kmなのですが、今現在、約15kmが市民の力で完成しております。

我々行政としては、何もしていないこともないですが、市民の力を借りるということで、桜を植えることも市民が行います。そして我々は、そのサポートをするくらいのことで、毎年約400人くらいの方に集まっています。もちろん家族連れが一番多いです。お子さん、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、3世代で見える家族が一番多いです。これは、決してボランティア登録をしているわけではなく、公募で来ていただきますので、単なるボランティア活動です。

管理や保全につきましては、やはりボランティア登録をしていただいて、やっております。我々は緑に関するボランティアは「パークレンジャー」と呼んでいますが、現在1600人位の方が登録されています。桜に関するボランティアの団体は2団体、今年になって1団体増え、今3団体ございます。何分にも、先ほどいいましたように行政の力だけでは、スピードがございません。市民の力をいかに借りるかによって、スピードアップできると思っています。

今年4月に、市民の花木を桜とすることを発表しました。これによって、ますます市民と行政が力を合わせて、桜回廊の推進、また百十郎桜の保全活動を一緒に進めて参りたいと思っております。以上です。

篠田：はい、それでは長崎県大村市さん、お願いします。

久保：長崎県大村市の久保です。大村市は長崎県のちょうど真ん中くらいのところにあります。北は佐世保市、南は長崎市で、そのちょうど中間くらいのところにあります。一言で申し上げますと、大村市は長崎空港があるところです。世界初の海上空港とっておりますが空港があるということと、もう一つは、天正年間に天正少年遣欧使節という4人の少年をヨーロッパに派遣した城主、大村純忠というのがありまして、大村純忠は、我が国初のキリシタン大名です。

桜ということに関して申し上げますと、大村公園を中心に、大村市内に約1万3000本くらいの桜の木がございます。大村公園に、国の天然記念物、大村桜というのがあります。これは、2段の八重桜で、花弁が少ないもので60枚、多いもので200枚ほどございます。それと、もう一つそれよりも一回り花が大きくて、同じく花弁がたくさんあるのですが、県の天然記念物になっております玖島桜というのがあります。そういう特色ある桜があり、花は3月25日くらいから4月中旬くらいまで、桜で賑わいます。

それに続き、桜が終わりましたら花菖蒲が大村公園に咲き誇ります。桜と花菖蒲の期間で、大体大村市に来る観光客の約3分の1くらいの観光客が来るということです。大村市の観光客約100万人と書いていますが、その内の約30万人くらいが、春の時期に来ていただけるということです。

桜に関する活動ですが、一つは平成13年度に、「さくらの街おおむら推進委員会」というのを官民一体で作って、大村をどう観光と結びつけていくか、あるいは、桜をどう皆さんに楽しんでいただくかということで、委員会を作り、先進地の視察などを進めております。それから、大村市内に国道34号が通っておりますが、その沿道に桜の木を植えようということで、国に働きかけ桜を植えてもらっています。そして、それをマイツリーということで、桜の里親制度みたいな形で、それぞれの個人、あるいは会社のネームプレートを設置し、そこで手入れをしてもらう桜の里親制度をやっております。それから、大村市の南の方に鈴田地区というのがありますが、そこにすずた千本桜ということで、1000本植えようという活動もやっております。活動の一端を紹介させていただきました。

篠田：はい、御協力ありがとうございました。それでは、最後に奈良県吉野町さん、よろ

しくお願いいたします。

北岡：昨日の田中利典さんの御講話、先ほどの福井良盟さんの講演、小島さんの報告ということで、余り詳しく話す必要はないかなと思っておりますので、簡単に説明させていただきます。ただ、今後の方向性とか地元の方々の協力という点、2点ありますので、その辺に重きを置いてお話ししたいと思っております。

昨日からの話の通り、1300年前からの桜でして、修験道の御神木ということで、植え継がれてきた桜です。一番有名なのは豊臣秀吉が5000人連れて花見をしたとか、また、芭蕉、良寛、西行、本居宣長、いろいろな方が来られたといわれております。

現状は50ヘクタールに3~4万本の桜が生えているというところなんです。現在、年間吉野山には80数万という観光客が来られますが、その内の半数が、桜の咲いている約3週間ほどの間に来られます。

問題点のまず一つ目は、交通渋滞とゴミの対策というのがあります。これは50ヘクタールと広いのですが、実際入るところは尾根筋の末室だけであり、また、アクセス道路が169号線だけということで、ひどいときには20kmほどの渋滞が起きるといったことから、何とかしなければいけない。また、ゴミの処理も大変というところで、平成6年からその打開策として、パーク&バスライドを仮にやっつけていこうと、これを観光協会や駐車場管理委員会、また吉野町が中心となってやり始めました。そこそこの効果はありましたが、その後、平成16年に世界遺産に登録され、もっとこれは増えるだろうと。これはもっと真剣にというか、もっと本格的な取組みをしなければいけないというところで、パーク&バスライドの充実、そして、観光協力金をいただけないかと。

そして、これが主眼ですが、持続可能な体系やシステムをどう作るかということで、対策を練り、平成18年度に、吉野山の観光交通対策協議会を立ち上げ、その後、現状は吉野山交通環境対策協議会が、バスの予約をきちんとするというところで、バス予約センターの開設、協力金をいただく等の活動をしてきました。ちょうど4年目になりますが、まだ改善の余地はありますが、一応の成果を上げているところです。

もう1点が、桜の衰弱といいますか、先ほど報告していただいたことで、これは、財団法人吉野山保勝会が中心となり、そういう保護活動、今後どういう部分をやっていくかということから始まったわけですが、いろいろ危機を訴え、NHK または読売新聞に取り上げていただきまして、平成20年には、奈良県と吉野町と、また地元団体で構成いたしま

すさくら AID 実行委員会、そして、読売新聞大阪本社、また南部銀行さんなどにも入っていただきまして、「吉野の桜を守る会」というのを立ち上げていただきました。読売新聞さんは、社告を打って全国展開をしていただきまして、いろいろな方から吉野の桜が大変だということで、大変御協力いただいております。

一例を挙げますと、俳人協会の方々が、俳句を詠むのは「もののあはれ」だけではなくて、環境問題にもということで、昨年チャリティをしていただき、数百万というお金をいただいております。また、今年の春には句会を開いていただき、その時の作品がちょうど後ろの方に展示してございますので、見ていただけたらと思っておりますが、そういうお手伝いをしていただいているところです。

行政としましては、どういう取組み方でどうフォローしていくかという点です。私が一番気になっているのは、吉野山の方は熱心なのですが、それ以外の地域の方は、それほど熱心ではないということです。何とかこれを町民全部で盛り上げなければいけないということで、何度もお話しさせていただいておりますが、昭和 23 年から、今は統合された吉野山小学校で、子どもたちがずっとサクラノボを拾って苗を植えています。これを町民全体に広げたいなという動きをやっていっているところです。

もう一点は、このきれいな桜を町民全体が見たことがないということで、もっと誇りに思える町全体の宝として見ていただけるような取組みをやっていかなければいけないなと思っております。

篠田：はい、ありがとうございました。一通り、各自治体の方から、御報告をいただきました。

それでは、フリーディスカッションに入りますが、桜の文化だとか、あるいは保存育成の技とか、手法とか、言葉では言うておりますが、いろいろなものがあると思います。昨日、実は我々一行は、こちらの吉野山保勝会の方々の御案内で、実際に桜を見てきました。伺いますと大正 5 年、1916 年に結成されたという大変古い、恐らく桜の住民団体としては、日本で一番古いのではないかと思います。こちらの構成員の数とか、あるいは大きな活動をされているわけですが、活動費は一体どこから出ているのかなとか。しかし、それなりに悩みもあると思うのですが、そういうのをお聞かせいただければと思います。

と申しますのは、やっぱり住民の力を活用しないと、なかなか桜を次世代につなげていくことができないと思うのです。例えば、仙北市さんなどは、なかなか住民の桜の愛護団

体が育っていないという話を聞いています。そういう点で参考になるのではないかと思いますので、吉野山保勝会の現状等について、お話しいただければと思うのですが、これは町長さんよろしいでしょうか。

北岡：吉野山の桜は、金峯山寺が廃仏毀釈で非常に失速した後、また大正時代にブームがありまして、その流れがあったと思うのですが、大正5年に、財団法人吉野山保勝会ができた。会長には、当時のお公家さん、宮家の方をいただいてということで、その後は、代々吉野町長が保勝会の会長です。ただ、メンバーとしましては、ほとんどが吉野山の方だけで、吉野山の方々が自分たちのお金を出し合い、また賛助会員を募って運営をしているということで、最近になってこそ、寄付を募りながら吉野町を經由してお金を出すということをやっておりますが、基本的には、地元の方々の努力でやっているということです。

篠田：今抱えている悩みは、どんなことでしょうか。

北岡：先ほど申し上げましたが、実は50ヘクタールを地元の700~800人という人口だけでどう持っていくかということで、メンバーとしては広くとってせいぜい50~100人しかいないというようなところ。しかも少子高齢化で、今後10年20年先だれがやっていくのかというところが、非常にづらいところ。そのためにも、皆様方にいろいろな御寄付をいただいたり、御協力をいただきたいというような運動をしているところです。

篠田：先ほどの調査チームも、保勝会の仕事として行われているという話でしたが、予算といたしますか、活動費として、最近だと年間どれくらいのものなのでしょうか。

北岡：詳しくは分からないのですが、もともとは、微々たるお金です。数百万もないかなと。ただ、最近は御寄付をちょうだいしまして、調査チームの費用等も含め、あるいは、チャリティを訴えるようなコンサートを開いたりということで、最近は予算規模的には広がっています。

篠田：そうですか。ありがとうございます。

新ひだか町長さん、先ほどしずないさくらの会の御説明がありましたが、驚きました。

200人の個人の会員で、1人頭、年間5000円の寄付ということで、今、1330万の累積の基金があると。それ以外に町の予算もあるということで、住民の皆さんの理解というか、協力がすごいなと思うのですが、これはなかなかできる技ではないと思うのですが、何か特別なうまい技があったのでしょうか？

酒井：しずないさくらの会の会長をやられている方が、地元の事業家で、70歳を過ぎている方ですがなかなか有力な方で、リーダーシップがあり、若い方は30代くらいから、それより上の年代の方に声をかけ会員になっているんですね。会員は、必ず5000円拠出することになっていまして、私も会員です。その代わりに、法人会員は、1万円くらい出していると思います。それで、毎年100万以上集まります。200人くらいいますので120万くらい集まる。それを町の基金条例で積み立てるようにして、そこに今積んであるのが1300数万円と。

それで、町の桜管理のための予算は300万くらいかと思うのですが、道路の桜の下の草刈りに、これも300万400万つぎ込んでいますので、700～800万年間つぎ込んでいます。管理は、今は主として森林組合さんが、町からの請負でやっている。それとさっきの桜の会の人たちが、ボランティアで軽微な管理を行っている、という状況です。

篠田：ありがとうございます。仙北市長さん、いただいた資料によると桜の愛護団体がなかなか育たないということが書いてありますが、今聞いていただいた先輩の二つの団体の事例などを見て、仙北市として何かお考えがございませうか？

門脇：実は、今朝も仙北市の桜アドバイザーの黒坂さんとずっとお話をしていて、もしかして行政が余り先ん出ていると、住民の方々との距離が出てしまうのかなと。そういう反省も必要ではないかなと。逆に、秋田県のすぐ近くの町村の中には、結構、厚意の高いリーダーシップを取る方が、そういうお触れを出して、かなりそういうスタッフを集めるということもやっています。一概には言えないのですが、その桜の状況とか、桜を取り囲む町民、市民の意識で、やはりこれは、いろいろな手法があるのかなという感じがしますね。

篠田：一方では、先ほども紹介がありましたが、地元の小学4年生は案内人を買って出ている。あるいは中学2年生が、桧木内川の整備の活動をやっていると。幼いときに、こう



いう経験を踏んでいると、大人になればやっぱり慈悲の心が育って、よし、いっちょ組織を作ってやってやろうか！という風になるのではないかと思うのですが、そういう教育とのつながりというのは、どうなのでしょう。

門脇：それは、とても意識的に大切なところで、社会教育の側面からもそうですが、さっき話したとおり、郷土愛を醸成するためには、そういうところの素材を大切にしていくということが、自分の生活を守ることになるんだというような意識付けが、とても大切だと思います。

これは、もう 20 数年やっていますから、その当時小学校中学校だった子どもたちが、大人になって今桜係にいるという状況がありますので、これは結構有効だったと思います。

篠田：では、これから期待をできそうということですか。

一方で、北区さんの報告の中でも同じように、住民の皆さんの美化のボランティアはあるけれど、桜についてのボランティアはしているけれど、住民活動がされていないということが書いてありますが、それはそういう住民の保護団体がいないということでしょうか？

飯窪：はい。先ほどお話しさせていただいたとおり、区の方で、行政が主体となって、公園整備や道路整備を進めている中の一環として桜の保全をしているのが主体となっておりますので、どうしても地域の方のボランティアということには、今のところ結びついていないというところがあります。

篠田：それはどうですか。持続していくということを考えると、今、北区は、全国の自治体の中では豊かな方で、お金はたくさんあるのか分かりませんが、地方財政は大変苦しいわけですね。そうすると、住民の力をどうしても借りざるを得ないと思うのですが、そういう点は、どうなのでしょうかね。

飯窪：はい。正におっしゃるとおりで、北区でも、桜だけではありませんけど、いろいろな形で地域の方々のボランティア活動が進んでいるところです。またこの中で、観光に関しては、区民の方に観光ボランティアになっていただいているのですが、この方たちが、地域の魅力を発見する中に、やはり桜に注目しています。この桜は元気がないねとか、こ

の桜は大丈夫なの？といった声が上がっているところなので、そういうところをすくい上げながら、行政と連携を取っていくというのも、皆さんのお話を伺っていると、一つの方策なのかなと感じたところです。

篠田：ありがとうございます。日立市さんの話の中で、桜パートナー事業があるという報告がありました。特定の企業や団体に、パートナーとしてお願いされていると思いますが、これはちょっとユニークではないかという気がします。例えば、パートナーになるための手法だとか、あるいはパートナーであるがための義務とか、それに要する費用とか、そういうのはどういうことになっているのでしょうか。

庄司：先ほど大村市が、同じようなことをやっているということでしたが、基本的には、今私どもでも都市化がかなり進んでいまして、昔の自分たちでやろうという意識が薄れてきているというのが実態です。そういうことで、御寄付を主体として、実務は行政がやるというようなことが、桜パートナー事業の骨子です。1 パートナー20万円ということで御寄付いただいて、桜の苗木を植える。それから植えた桜にメッセージプレートをつける、そういったお返しをするというようなことで、やっています。

篠田：もう一つ日立市さんでは、桜守の育成ということで、市民の皆さんを桜守とする育成をしていらっしゃるということでしたが、桜守というのは、なかなか専門的な知識を要するような気がするんですけど、これは、どういうプログラムでやっているのでしょうか。

庄司：はい。まず、養成講座というのをやります。講座を受けていただくのは、3年間で1プログラムが終わるといようなかなり長い講座なのですが、まず初級講座をやりまして、それから次に中級。せん定ですとか植栽の方法に至るまでの講座。最後に上級ということで、実際の現場でそういったことをやる。そういう3段階を経て、桜守という認定を市民の方に受けていただくということです。

今までに24名参加されて、20名修了されています。

篠田：そうですか。桜守の方は、全員樹木医というわけではないんですか。樹木医は資格がありますが。

庄司：はい、そこまでではないですが、それに近いような知識を持った方々を育てるとい  
うような。

篠田：そうですか。今一通り、住民の皆さん方の力をどう活用していくかということにつ  
いて、いろいろ事例を聞いてみたのですが、今の意見を踏まえながら、質問や御提案がご  
ざいましたら、お受けしたいと思うのですが、いかがでしょうか。

ちょっと声が出ないようですので、それでは、その後といたします。

もう一つ、桜の文化ということで、その自治体固有の品種があるというのは、ものすご  
く大きな財産ではないかと思えます。日立市さんと大村市さんでは、固有の品種があるわ  
けですが、固有の品種を持つ意味、それから、これを伝承していかなければいけないとい  
うことで、どういう風に伝承していくか。その悩みというか、そういうのがあるか分かり  
ませんが、大村市さん、その辺についてございませんか？

久保：大村桜というのがあるのですが、いろいろな自治体から譲ってほしい、苗木をほし  
いということを結構言われます。この前も、関西のある自治体から 500 本くらい買えない  
かという話がありまして、ちょっとそれは無理だと。ただ、少しずつではありますが、幼  
木を市の方ですずっと育成しております。ただ、これも年限がかかることだし、予算のかか  
ることなので一気にはできないのですが、数十本ずつ、何とか幼木を育成しておりますの  
で、1 本とか 2 本とか、少しずつならお分けしている状況です。

篠田：日立市さんの方は、今の固有の品種について、お考えがあれば。

庄司：今のところ大村市さんと同じように、育成をしている段階で、その苗木を主に市内  
に植え始めたところで、これからそれを育て、ほかの場所と同じようなスポットにしてい  
くというのが、今のところの考え方です。

篠田：大村市さんの場合は、市内に咲いている桜は、主に大村桜だったり、玖島桜だつた  
りするのでしょうか。

久保：いや、大村桜、玖島桜は、一部です。やはり普通の山桜とか里桜とか、中には御衣香桜というのがありますが、一部に限られています。

篠田：日立市さんなのですが、固有の品種というのは、そこに行けば咲いていて、これが例の日立紅寒桜かと分かるようになっているんですか？

庄司：はい、市内何カ所かに植えてありますので、おいでいただければ、分かるようになっています。

篠田：保護・育成の技や手法について、また、子どもたちへの伝承というのは、非常に大事なわけですが、北区さんにちょっと伺いたいと思います。学校の統廃合で、学校の桜を何とかして守っていこうという声が出ているということですが、それはやはり、子どもたちにとってみて、自分たちの育った学校の桜という思い出を維持したいという、そういう気持ちの表れなのでしょうか？

飯窪：北区では、少子化がかなり進んでおり、今まで20あった中学校が12に統廃合されました。統廃合しているところに、新しく学校の改築をしたりするのですが、どうしても残った学校の後利用の関係の問題が起きたとき、校庭にある桜の木に対する思いが、爆発的に意見が出てきます。自分たちの思いがある桜ですので、どうしてもこれは残していただきたいと。ただ、方策として、具体的な方策がないのですが、残してほしいというところはかなり出ていますので、こういったところを今後地域の方々と、話し合いを進めながら保存、あるいは対応について考えていかなければいけないのかなと思っているところです。

篠田：福井住職さんから莊川桜の話がありましたが、あれは、御母衣ダムの湖底に沈むあるお寺さんの400年たつ桜、それを何とかして助けなければいけないということで、高碓達之助さんが大変な情熱を持って、湖底から60mくらいのところに引き上げた。正に慈悲の心だと思うのですが。今の自分たちの育った校庭の桜を守っていくという、本当に桜に対する慈悲の心という意味では、ものすごく重要なことではないかなと思うんですよね。桜のまちを標語している北区としては、これは単に教育委員会とかだけの問題ではなくて、

非常に全庁的に取り組むべき話ではないかなと思うのですが。もう少しコメントがあればお願いします。

飯窪：そういった意味で、北区は確かに飛鳥山だとか街路樹だとか、群れをなしている桜というのも確かに一つの魅力なのですが、地域の中にあるたった1本の桜でも、その地元の人にとって見ると、大切な宝だというのが、自分も改築したときに思ったところです。こういった思いというものを大切に、その保存の方法を行政だけではなくて、今までのお話の通り、地域の方々とどうやって守り育てていこう。北区も、区民の方と共同して行政を進めているところでありますので、その辺について、今後話合いを持ってやっていくのも一つの方策なのかなと思います。

篠田：はい、ありがとうございます。

各務原市さんで、市民の声を聞いたら桜回廊をやろうと、正に市民発想の桜回廊ということで。森市長が何でも日本一をやりたがる人なので、私は森市長の発想なのかと思ったら、市民の発想であるというところがなかなかすばらしいと思います。市民の皆さんも自分たちが発想したなら、自分たちの力でやってみせようではないかというところではないかと思うのですが、39kmの回廊となると行政もなんらかの管理が必要だということで、官民共同ということになるかと思いますが、もう少し、その辺の役割分担を詳しくお話しいただけますか？

金武：うちの市長は日本一とか、何でも1番がいいというのはよく言われます。元々市民の話から上がってきた39kmというのは、市民ではなくて、市の方でやるならばということだったのですが、元々の発端は、ワークショップでの市民の意見でした。我々は、やはり市民とのワークショップをまずやって、工事の途中で市民と一緒にやる。その後の管理も一緒にやるというのが、桜回廊もそうですし、公園の整備でもそうです。ですから、初めから行政だけで進むと、後がやっかいになりますので、最初から市民の意見を聞いて、その代わり皆さん、整備手伝ってよ、管理手伝ってよというのが、我々の方法です。

今回、桜回廊での市の役目というのは、日程を決めること。市民が植えた後、どうしても添え木がいりますので、添え木を入れるのは、市の仕事です。あとは、我々広報誌の方に掲載しますので、大体400人くらいが集まってくるのですが、なるべく家族できてくだ

さい、お子さんを連れてきてください、そうすると私が植えた木とか僕が植えた木ということに子どもたちがなりますので、将来まで楽しみもあって、大事に育ててもらえるかなと思っています。

篠田：それは、39km になると沿道の自治体が、ここからここまでは我々の自治区というか、町内会というか、そういう風な管理も含めて、地域割りみたいなこともあるんですか。

金武：当初は、そういう地区割りをしていましたが、ここ 2~3 年は市内全域の募集をしますし、ボランティア活動に入られる方も、極端なことをいうと市外の方もお見えになります。だから、地区は限定せずに、今 3 団体ありますが新しく作ってもらっても結構ですし、そこに加入してもらっても結構ですということです。

篠田：水やりや肥料をやったりするのは、市の仕事ですか。

金武：基本的には自然に育てるということですので、水もなし、肥料もなしです。ただ、ボランティアの方がやっているというのは、聞いたことがあります。なるべく市は手を出さず、ボランティアの方に好きに育ててもらおうと。その中で、百十郎のボランティアは、先ほど桜守というお話が出ましたが、そこまでたいしたことはないですけど、やっぱり講座を受けて、現地指導された 30 数名の団体がありますが、そこは自分たちで枝を切られますし、すばらしい団体だと思います。後の二つはまだ発足したばかりなので、周りの草を刈ったり、見守るという状況です。

篠田：今、各務原市の話、北区の話も聞いてきましたが、今日は会場の方に、近隣の首長さん、あるいは副村長さんもいらしていますが、いかがでしょうか。例えば、大和高田市の市長さん、今までお聞きになって、御意見がありましたら伺いたいと思うのですが。

吉田：私たちのところとかなりスケールが違いますので、驚きながら聞かせていただきました。うちは、2 km くらいの堤防の両岸に 1000 本くらいの桜が植わっています。昭和 23 年に市制をしいて、それを記念して、その時の市長さんと青年団活動の一環ということで、桜が植えられました。そこから今 60 数年経ちますので、かなり大きな木もありますので、

しっかりと守っていききたいなど。それが中心に公園があって、池があって、市民の憩いの場というつながりになっています。その前に病院があって、桜の季節には、本当に結構な人が来ていただいていますので、守っていききたいなと思っております。

篠田：管理をするとか、守り育てる。そういう住民組織のようなものは、青年活動のスタートからすると育っているような気がするんですが、いかがでしょうか。

吉田：桜の里親といいますか、オーナー制度みたいな形で、70人くらいのボランティア的に自分で草を刈ったり、お世話をしていただいているという制度があるのですが、何しろ川岸の道ですので、かなり危険なところにあるので、子どもさんとか家族連れで憩いながらというのは、難しいかなという気がしています。

篠田：お隣の大和郡山市長さん、何か御意見がありましたら。

上田：郡山の場合は、お城の中の桜ということでして、旧郡山町は元々は筒井順慶それから、豊臣秀吉の弟の秀長が築いたお城で、一説には秀長が桜を植えたということになっていますが、もっと歴史は浅いのかもしれません。

お聞きしていてどこも同じだと思いますが、郡山の場合も何回か危機があったと思います。記録に残っている一番の危機は明治維新の頃だろうと思うのですが、その時はやっぱりだれかが提唱して植えてます。次が大正だったと思いますが、大正期は、当時の町長さんが提唱し 3000 本植えたということでした。次の危機は、戦後だったと思います。今来ている危機は、何番目かの危機だと思いますが、数年前に市政 50 年を記念して何百本が募りました。2 万 5000 円で募って、これはものすごい人気があったのですが、今そこに結婚記念とか、亡くなった人への思いというものが込められています。これが正に日本人の桜に対する心だなと思ったのですが、これをまた改めてやりたいなど。そう思うほど、実は痛んでいます。

過去の経緯を見てみると、50 年後 100 年後を考える発想が昔あったんだなと感じます。今はそれが失われているというのが、これまでの何十年かのつけが来ているのかなというような思いがするんですね。街路樹も一緒ですが、これは県の木である、市の木であるという意識がすごく今高くなって、家の前に生えている木でも、皆さん自分の木だとはおっ

しゃらない。例えば、落ち葉が庭に落ちてきたら、これは市の木から落ちてきたんだから、市の職員取りに来いというのが現状ですよ。それは、どうもおかしいのではないかなということ。

それから、そういう意味で実は先日オランダのアムステルダムで聞いた話ですが、あそこは街路樹を大事にしているんですね。今年は夏が暑くて、水不足だと、家の前の街路樹に水をやってちょうだいというラジオ放送が、流されるそうです。こういう事がされるまちというのはすごいなと感動しました。

それともう一つ。ソメイヨシノが、日本では8割くらいを占めているんですか。これは、ちらっと聞いたことがあるのですが、遺伝学的に問題であると。こういうように覆っているのは、生態学的に問題があると聞いたことがあるのですが、そのことはまた、教えていただきたい。逆に、そういう意味で、固有の桜を大事にしていただけたらと思いました。

篠田：ありがとうございました。それでは下北山村の副村長さん。

南：下北山村の南です。私どもの村は、吉野町から南に約60kmほど下った、過疎の山村です。もう少し車で30分ほど南へ下りますと、太平洋熊野灘があり、気候は概して温暖ということで、恐らく奈良県では、桜の開花が一番早いのではないかと考えています。

昭和30年の後半くらいから、私どもは何もない地域ですので、当時の村長が何か将来に残そうということで、公園内や道路沿いに桜を植えて、それが大体50年くらいから桜の花が見られやすくなってきて、桜の木の下で写真を撮ったりお弁当を広げたり、そういう花見をされる方が少しずつ現れました。

昭和59年に商工会の方が中心となって、下北山スポーツ公園というところで第1回下北山桜祭りというのを開催しました。段々規模が大きくなってきたので、商工会だけでは手に負えなくなってきて、全村的に、村も地域の会社も含め組織した実行委員会を作ろうじゃないかということで、今は実行委員会が桜祭りを運営しているところです。近隣の町村から沢山来てくださっていますか、やはり近年はテングス病でありますとか、そういった病気が発生し、枝払いはしていますが、毎年出てきています。

先ほど、桜調査チームの小林先生にもお聞きしたのですが、うちの場合、桜を植えっぱなしだったんですよ。何も手入れしていないということで、やっぱり桜を育てるのは大変ですよということをお伺いして、やはりそのままじゃいけないのか、これからは手入れ



をしていかなければならないかなということを感じています。

それから、補植ということで苗木も植えていっているのですが、これも先ほどちょっとお話が出たとおり、鹿の食害により壊滅的な状態です。しかし、大変近隣の町村さんはじめ、村民の皆さんが桜祭りを楽しみにしていただいていますので、やはりそういう獣害とか病気に対する対策を講じて、後々まで残していかなければならないかなという風を感じております。

篠田：ありがとうございます。小島さん、今ソメイヨシノが8割、これは問題がないのかという御質問がありました。また、各務原市では39kmの回廊を造るということで、大変、気宇壮大なのですが、市民にできるだけお願いしていると。そういうことになると、市民にやってもらうにしても管理という点で、注意しなければいけないことは何なのかということがあろうと思うんですね。そういう点で、専門家としてのアドバイスがありましたら、よろしく願いいたします。

小島：まず、実際ソメイヨシノが植えられすぎているということは、問題だと認識しています。ただ、ソメイヨシノが非常によく育って、美しく早く咲くと。それをなかなか覆うことができないということと、それ以外の品種、それを大量に購入する方法、そういうこともなくなってきている。要は、生産される品種が限定的になってきているというのがあります。ですから、そういったところから生産者の段階から変えていかないといけないということです。

もう一つ、ソメイヨシノも既に植えられている場所がたくさんございますが、毎年テングス病の罹病種が発生するという点について1点申し上げますと、テングス病というのは、タフリナというカビ菌の一種で、空気感染して増えていきます。いったん樹体に入りますと薬をかけても治りません。毎年罹病するということは、罹病して、竹ぼうき状に枝がぱっと出てくるわけですが、その位置しか取られていないんですね。そこを取っても、その下からまた出てくるということです。ですから、私も京都のテングス病対策をしておりますが、約3年間、大胆に手を加えますと、ある程度鎮圧できます。その場合は、やはり、罹病種の先端部分だけではなくて、大きな枝の元から落とす、そういう判断です。ですからその辺のノウハウが全国的に共有化されていきますと、同じ切るにしても、切る位置によって、その個体は3年間発症しませんよとか、4年間発症しませんよということは、

私の約 20 年の経験値の中で見えています。そういったことが共有できるような、こういった場でお話しできたのは良かったかなと思っております。

篠田：本巢市の淡墨桜は 1500 年の命を保って、今日に至っています。非常に危機的な状況もあった。それが救われて、現在生き生きと花を咲かせておりますが、淡墨桜というのは、端に本巢市だけの財産ではなく、岐阜だけの財産でもなく、日本全体の財産だと思わんです。これをやっぱり次の世代にバトンタッチしていくというのは、ある意味責任ではないかと思うのですが。こういう貴重な財産である淡墨桜をどう次の世代にバトンタッチしていくのか。今までの危機を乗り越えていった教訓をどう生かしていくのか、その辺について、お話しを伺えればと思います。

大熊：今、皆さんのお話をお聞きして、市民の方が共同でしているということについて、うらやましく思っております。本巢市におきましても、そんなことをできればしていきたいと考えておりますが、今のところは、なかなかそういう形になっておりません。市から委託をして、いろいろな保護のための事業を行っております。内部の空洞に以前埋め物をしまして、木質強化剤の塗布をしたり、内部から不定根といいまして根っこが出てくるのですが、それを誘導して地面に植える。土壌を改良して、根っこが広がっていくようにする。それから、地面の上に人が乗らないようにということで、枝葉の下は絶対に人が入らないように、囲いをしています。茅を上にも引かまして夏場の乾燥を防ぐ、あるいは軟らかい土にしておいて、根が張るようにという対策を毎年行っております。これは、国庫補助事業も受けておきまして、平成 16～19 年の間に 1500～1600 万円かけて、やっております。それから、通年管理ということで、市単独で行っておりますが、毎月モニタリングといって、2 回ほど樹木医の先生に診ていただいております。それから肥料の施肥業務、薬剤の塗布も補充していただいております。

それから、淡墨桜がある地域は結構雪深いところで、通常ですと 1m 近く雪が積もるところです。ひどいときは 3m くらい降るようなときもあり、冬季の雪つりも行っており、これが年間 100 万円くらいの経費がかかっております。今のところ行っている業務としては、そのくらいです。

篠田：今、国からの補助金で 3 箇年おやりになったわけですが、とにかく、ああいう老体

を維持して行くには、毎年それなりの経費をかけ、愛情を注がなければいけないと思うのですが、それは基本的には市の財政でやっているわけですか。

大熊：そうです。今のところは市の財政です。周りに公園があり、その部分の維持管理などについては、地元のシルバーさんをお願いしてやっているというようなことがあります。地元の保護団体というか、そういうものは、今のところない状態です。

先ほど、各務原さんが桜街道というようなことをおっしゃいましたが、本巢市においても要望はあるんですね。淡墨桜に行く道路が1本で、国道157号線しかないんです。その道路沿いに、今桜が入っているところもあるのですが、それを桜街道にしてほしいというような意見が、議会でもございましたし、観光協会でも出ています。そんなお話しがありましたが、市としては、市が先走ってそれはできませんよと。今の時代、市がすべて手をかけるということは無理なので、市民の皆さんの力を貸していただいて、その上で、皆さんが、例えば、用地とか植樹とか維持管理も協力していただけるようなことであれば、市も同じように協力しながらやっていきますというようなお話しをさせていただいているところです。

篠田：ポスターを見ると、オカリナの宗次郎さんが出ておりますが、あれはやっぱり、基金の募集活動の一環として、つなげてはいないんですか。

大熊：オカリナ奏者の宗次郎さんですが、今年度で18回目になります。今年は8月21日に、「宗次郎淡墨コンサート」ということで行います。これは有料で、大人1人2000円いただいています。ところが、実際経費の方が高くかかっておりまして、その基金に回るようなことはございません。でも、全国から来ていただきますので、淡墨桜のPRの一環と思って、させていただいているのが実情です。

篠田：大分メインテーマを巡って、議論が出尽くしたような気がするのですが、御出席の皆様で、是非、これは聞いておきたいんだというようなことがございましたら、挙手をしただき、問題提起をしていただきたいと思いますと思うのですが、いかがですか。

実は、仙北市の席には市長に変わって黒坂さんが座っていますが、黒坂さんもサミットの常連メンバーです。しかも、ご本人が樹木医であり、今は仙北市の桜のアドバイザーで

す。今まで黒坂さん聞いていらして、長い経験の持ち主として、アドバイスがございましたらお願いします。

黒坂：私は、19年桜の世話をしてきました。ゼロからの出発でした。先ほど大和郡山市さんから質問がありましたが、ソメイヨシノは全国の約8割、その通りです。明治から大正昭和にかけ、節目節目に植えられたようです。ただ、その当時はどうだか分かりませんが、テングス病がつき、これが非常にやっかいです。雪国だけかもしれませんが、野鳥が飛んできて花びらを食べちゃうんですね。これが非常にやっかいです。

そして、お客さんが多数いらっしゃればいらっしゃるほど、ほかのところと比較されません。例えば、うちの方では、弘前とかそういうところと比較されます。そういったところの管理体制とは、全然話にならないほどうちの方は規模が小さいです。

それから、管理体制なども私1人でしたので、非常に苦労しました。でも、桜というのは、手をかければかけただけ、答えてくれます。これが大変でしたけど、仕事をしていて非常にうれしかったことです。あとは、何よりもお客さんがすごいとか、すばらしいとか、言っているところをたまに通るかかると、これが一番うれしくて。残念ながら去年3月で定年退職を向かえましたが。桜は手をかければ必ず答えますので、皆さんも一つ実践していただきたいと思います。

それから、ボランティア団体が育っていないということでしたが、本当は、所有者の方が一番ボランティアだと思うんですね。何十年も何百年も、ずっとそれを守り育ててきてくださって、それが一番のボランティアではないかと思っています。掃除とか葉っぱの問題が出てきましたが、私どもでも同じです。隣の葉っぱが飛んでくるから枝を切れとか、そういうことがあります。だけれども、そういうのを守ってきてくださったことが、一番ありがたいと思っています。

篠田：ありがとうございました。昨日、保勝会の理事長さんと歩いているときに、昔は大阪の方から小学校の林間学校がこちらの方に来てくれて、子どもたちがそういう点で、吉野の桜に対する認識があったという意味だと思います。林間学校が全然なくなってきたという話を聞いて確かにそうだなと。小さいときに、林間学校などで桜の大切さを教わってくれば、これは非常に大きな財産になるのではないかと思うのですが、ちょっと広く広げて、奈良県内でもいいですし、大阪のような大都市の府県、あるいは政令都市あたりに

林間学校を働きかけるというのは、私は素朴でいいなと思っているのですが、吉野町長さん、その辺はどうでしょうか？

北岡：林間学校のシステムが最近どうなのか、そもそも私も分かっていないのですが、今、桜を守る会の絡みで読売新聞社さんにもお手伝いいただいて、親子で桜の学校といいますか、吉野にサマースクール的に参加してくれということは、昨年からやっております。わずかですけれど、50名ずつ程度参加いただいております。

あとは、たまたまですが、吉野町の中の廃校になりました小学校に、大阪府の野外活動財団が来ていただきまして、この春から営業していただいています。このプログラムとして、吉野山を回れるようにというようなところをこれから提案していこうかなと思っています。

篠田：はい、ありがとうございました。それでは、一応最初のテーマは、今のようところで終えたいと思います。

次のテーマ、「今後のサミットのあり方」です。冒頭申しましたように、一応21の自治体が、加盟自治体として名を連ねております。しかし、残念ながら最近では、ほとんど参加されないというところも見ておりまして、その理由の一つが、平成の大合併で大変熱心な町村が合併したわけだけれど、市役所の所在のところ、あるいは市長さんが、さほどその点については、前よりは関心が薄いというようなことも、多分あるのだと思います。そういうことで、かつては大変熱心なところが、来られないということも出ています。今回は8自治体ですが、昨年も8自治体だったと思います。そのような状況が続いております。

いろいろなサミットがあるんですね。昭和60年代にいろいろな名前のサミットが出てきましたが、恐らくここまで続いているサミットというのは、まずないのではないかと思います。そういう点では、継続していらっしゃるこのパワーはすごいと思うんですけど、でも、今のよう何となく先細りのようなことだと、これでいいのかな？という風に思うのは、無理からぬ話です。そういう点で、まず吉野町長さんから、御提言をいただいて、それを受けて、皆さんから御意見をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

北岡：はい。吉野町からの提言という形になります。実は、先ほど講演をしてくださいま

した福井良盟さんが、1回目から22年間やってこられ、私は継ぎまして一昨年のさくらサミットの会議だけというのが、東京でございましたときに参加して、昨年の仙北のサミットに参加しました。そして、今回は、平城遷都1300年の絡みもありますので、吉野で受けますよといったものの、どういう風なことなのかなというのを改めて考えてみました。

今、篠田先生からお話がありましたように、平成の大合併、あるいはその後の財政改革等で、経費削減から非常に参加団体が減っておるのではないかと考えているのですが、そろそろ平成大合併も終息宣言がされましたし、また、地域主権という考えから、地域を改めて作っていくという機運も逆に高まってきているのではないかと。行財政改革も進んできて、さあ今度は街を作っていくんだという状況になりつつある中で、改めてサミットの意義を皆様方にお知らせするなり、今までかかわっていない方にもPRするというようなことも含め、サミットの意義をもう一度お考え直していただきたい。参加していただくのではなくて、なかなか来れない方に聞くのが本当かなと思うのですが、今後のサミットの方角性は、この場で改めて確認して、次の20回目に進んでいただきたいなという思いで、提言したところです。

篠田：ありがとうございます。昨日、事前会議の場で、それぞれの出席者の方々から御意見を伺ったのですが、それは仲間内での話でした。今日はこういう公開の場で、かくあるべしということをそれぞれの自治体の方々から、御意見をちょうだいしたいと思います。

では、今度は南から北へ上がっていきたいと思いますので、大村市さんから御意見を伺いたいと思います。

久保：大村市は、観光の柱を桜ということで据えておりますので、途中2回ほど出席できておりませんが、ほぼ毎回出席させていただいております。花と歴史の街ということで、先ほども申しましたとおり年間の観光客の3分の1は桜の時期に来ますので、そういう観光客を街中に案内しております。

今後もさくらサミットは続けていただきたいということは、市長も考えておりますが、せっかくこのようにさくらサミットの自治体が21自治体ある、全国に情報を発信する自治体があるということが大きな力ではないかと考えています。ですから、さくらサミットに今後も参加していきたいし、情報発信としては桜が咲く時期に開催していただくということも、モチベーションを上げるために大切かなと考えております。そういったときに参

加自治体が、こういった機会を通して、今回もポスターやパンフレット等を置かせていただいています、そのようにいろいろな物産の PR も合わせてできるような工夫も考えて行っていいのではないかと、考えております。

篠田：ありがとうございます。大変市長さんは熱心に取り組んでいただいている、是非とも続けるべきだというお考えであるということのようです。情報発信が大切だということですが、情報発信のやり方ですね。今パンフレットを置くという話がありましたが、もっと積極的な情報発信の方法はないものかなと。

実は、福島県の富岡町で開催したときに、インターネットをうまく使って情報発信すべきではないかということで、「桜里園ネット」というサイトを立ち上げて、それを各参加自治体のホームページにリンクさせてという提案があって、一応そういう風にやられているわけです。さて、それを見て、新しく入りたいというところが出てきてないというところを見ると、なかなかそれが効果を果たしていないなという感じがします。情報発信の一つの問題提起と、開催時期についてでした。

では、次に各務原市さんお願いします。

金武：今回から参加させていただきましたが、今回 8 自治体の出席で、いろいろとちょっとまねてみようかなというところもありますし、大変だなというところもありますし、我々の街も宣伝させてもらえますし、私は本当にいい会議だと思っています。

当然、サミットを打ち切るとか、そんな話にはならないと思いますが、是非、首長さんも大切ですが、実務の方も一緒に同行するというのが、大切だと思います。当然首長さんが意見を言いますが、実際に仕事するのは職員ということになりますので、セットで来ると一番いいかなと思います。といいながら、私どものところの市長が来ていないので、申しわけないですが、非常にいい会議だなというのが、実感でした。

篠田：ありがとうございます。とにかく今回初参加ということで、前回もオブザーバーとして参加はしていただいていたのですが、大変新鮮な思いを持って見ていただいているなと思いました。

では、本巣市さん、お願いします。

大熊：私は今年で2年目、観光行政をやらせていただいて、初めて参加させていただいたのですが、こうやって吉野町に寄せていただいて、淡墨桜のことをお話しさせていただき、皆さんに少しでも知っていただく、大変貴重な場だと思っております。私どもも今日市長が所用があり、出席できなくて大変残念に思っております。でも、この事を市長に十分にお伝えして、皆さんの思いもお伝えしながら、今後とも継続していきたいと考えております。

篠田：ありがとうございます。北区さんお願いします。

飯窪：北区です。北区も第5回目から参加させていただいて、中2回ほど欠席することがありましたが、出席させていただいているところです。北区におきましても、本日区長が所用で欠席させていただいておりますが、一昨年の会議が東京で開かれたときには、区長も出席させていただき、その中で区長自ら、やはり継続していくべきだろうと発言がございました。北区としても桜は一つの観光資源です。先ほどの篠田先生のお話の中でも現地主義、現地の中でどういう取組みをしているのかといったところ、それは観光の視点でもありますし、桜を守るという視点でもありますが、こういったところを学びながら、自分の職場に持ち帰って、それを生かしていく。こういった活動も必要なのかなと思っております。

ただ、庁内の中でもたまに話が出るのですが、さくらサミットで、どのような活動をしているのかというところが、なかなか伝わりづらい。そういったところが、少し課題としてあるのかなといった点は、少し認識しているところでもあります。以上です。

篠田：はい、ありがとうございます。それでは、今は継続すべきだという意見でした。ここに来ていらっしゃる方は、サミットの常連さんですし、非常に情熱があるわけなので、継続すべきだというのは、ある意味当然の御意見だと思うのですが、加盟自治体を増やしていくということも考えていかなければいけないことだと思います。21自治体のままで、熱があるところだけ継続していればいいということであれば別ですが、そうでなければ、やっぱり増やしていくということも必要だと思います。そういう観点から、例えば日立市さん、御意見ございませんか。



庄司：増やしていくということになりますと、日本全国どこでも桜があるわけですから、そういった意味では声をかけ、このサミットの趣旨に同意していただけるところをどんどん囲い込んでいくというようなことを何かの形ですればいいのかなと思うのですが。私のところも、今回市長が体調が余り良くなって来れなかったのも、私が代わりに来たんですが、私は立場上どちらかという、お前ら何やってるんだとものを言わなければならないという面もございます。そういった中で、今回参加させていただいて、本当に桜を使ってまちづくりをしなければならない大事さと、皆さんが非常に苦労されている、そのことをいろいろな意味で共有できるということで、意義のある会議なのかなという認識を改めてしたところです。

そういったところもありますので、さっきの現地主義の話ではないですが、一度参加してみないと分からないところもあるので、参加されていない団体に声をかけ、加盟団体ということではなくて、視察という形で参加してもらおうというのも、一つの方法なのかなということも、今お話しをうかがいながら考えていたところです。

篠田：ありがとうございます。財政部長さんというのは、削るのが得意ですから、次は別のところが考えているかもしれませんが、近いうちにもう1回、日立市さんで開催してもらおうとありがたいなと思いました。

仙北市さん、よろしくお願いします。

黒坂：このさくらサミットですが、19回中17回ほど出席させていただき、その中の情報は、非常に有益で役立っています。参加する方が少ないということでしたが、日本桜の会に、全国から選びました桜名所100選というのがあります。こちらの方に声をかけて、やはり、情報を共有したいなと考えております。100箇所もありますので、もっと増えるのではないかなと。桜の情報がたくさんありますので、そういったところに声をかけたいかがでしょうか。

篠田：是非ともそれは、お願いしたいなと思います。それでは、新ひだか町さん。

酒井：さくらサミットに参加することは、非常に意義のあることだということで、それは、市町村長であっても、副市町村長であっても、職員であっても、それを前向きにとらえる

ような参加意識を持てばいいということで、私たちも第3回以来、ずっと継続して出ております。

それと、明治大正からの偉大なる遺産であります二十間道路が日高管内は、日高山脈を背にして7町ありますが、私たち新ひだか町の二十間道路が、一番の観光資源であるということで、これをいかにして更に磨きをかけ、売り込んでいくかということでも、サミットに参加することは大変意義のあることだと思っています。ですから、今黒坂さんがおっしゃったように、日本の道百選とか、さくらの名所100選に決まっている町々に声をかける。例えば、北海道では、私たちのまちの桜よりも圧倒的に本数が多いのは、函館の近くの松前町の桜です。函館市も五稜郭公園の桜もありますし、ちょっと北海道で1箇所だけの加盟というのはさみしいなということで、当面そういうところが念頭に浮かびます。

昭和60年代にサミットというのは、よくできたというお話でしたが、実はホースサミットというのがありまして、私たちのまちは、日本一のサラブレッドの産地なものですから、ホースサミットにも参加していますが、こちらの方が、内輪の話ですが、より深刻な状況で、なかなか維持するのは大変なことです。ですが、桜はやはり日本人の心なので、それはやはり違いますね。

篠田：はい、ありがとうございます。それでは、吉野町さん、最後お願いします。

北岡：はい、いろいろ御意見をお聞きいたしまして、気を強くしているところです。都合があつて来れなくなっている方々、また、今までこの存在を知らなかった方もたくさんいらっしゃると思うので、サミットの今までの19回、あるいは23年の歴史の中で、首長もいろいろ変わっていますので、サミットの中で取り上げた課題のようなものを蓄積できたらまとめていただいて、もっとPRに使っていただければ、そんなことならば行こうという形にもなるのではないかと、というようなことを思っておりました。是非、そういう問い直しとPRの仕方と、それからもう一つは拡大していくということで、よろしく願いしたいなと思っています。ありがとうございました。

篠田：私自身も、できるだけ加盟自治体を増やしていくということは重要だなと思います。というのは、やっぱり数が増えれば、いろいろ学ぶべき知恵があると思うのです。限られた8人の知恵と違って、増えれば増えるほど、また学びあえる知恵があると思うのです。

そんなことで、昨日実は、準備の段階で御意見を伺ったとき、私が御意見を申し上げたのは、8自治団体がいるわけですから、1自治体が2団体声をかけていこうということになれば、一挙に数が増えますので、そういうようなことをしてみたらいいのではないかと。桜といえば、青森の弘前がすぐ浮かぶけれど、なぜ弘前が来ていないのかなということもあります。決して、さくらサミットに入るのが嫌だということではないと思うんですね。やはり、声かけをしていくというのも、非常に重要ではないかと思います。

それから、北区さんの話もございましたが、一体何をやっているんだと。どういう風な蓄積があるのかとか、そういう活動の実績というのをこうなんだよと見せるのがあれば、非常にいいのではないかということでした。実際、今回を含めて19回やっていますが、だてに19回やっているわけではありません。毎回テーマがあり、今回は、主に文化の継承というか、そういうことでしたが、桜と観光とか、桜と特産品作りとか、桜と市街地問題だとか、いろいろな形で、それぞれテーマを作って勉強してきています。それを、このサミットの常設事務局である出版社のぎょうせいの方で、議事録を残しています。それをデータ化して、全国で共有することも可能です。ただ、それもお金のかかる話ではありますが、そういうことで、さくらサミットの財産、これを多くの自治体の共通財産にしていくようにするというようなことをやってみてもいいのではないかと、そんな感じに思っておりました。

とにかく、先ほどは、仙北市さん、それから新ひだか町の町長さんから、さくらの名所100選、そういうものに声をかけてみたらという御提案もありましたので、それを頭に置きながら、今後のあり方を検討していただけたら幸いだと思っております。

一応、テーマ2もこのようなことで、とりあえず閉めたいと思います。今回、吉野町さんには2回目を引き受けていただきましたが、特に今、伝承ということについて議論して参りました。やはり現地主義というか、現地に来て、本当に大変なことだなど。3万本の桜が、密植されているといいながら、山に散らばっている。これをどう保存していくかというのも、なかなか明確な答えが出ないわけですが、それを一生懸命になって対応しているところを見て、非常に私自身、感動いたしました。

何かこんなことができないかなと思って、私保勝会の理事長さんに話したのですが、かつては下草というのは、ヤギとか牛が食べていたということを知っていて、これなんか今更、牛やヤギではないのではないかといわれたらそれまでですが。実は、兵庫県豊岡市にはコ

ウノトリが飛んでいますね。コウノトリが生きていくためには、農薬をまかない水田があって、そこにドジョウが生息している。そういう環境が用意されて初めて、実はコウノトリが生息しているわけです。それを逆手にとって、そういうところで作ったお米ですよというのを売っています。大変、付加価値の高いお米ができて、高く売れているという話を聞いて、吉野の下草を食べたヤギの乳で作ったヨーグルトやチーズだとやれば、これは結構売れるんじゃないかなと、私はそんな夢をちょっと持ちましたが、何か楽しみながらというか、そういう発想の転換のようなことができれば、なお活力がつくのではないかなと、このように思いました。

ということで、今日は、本当にいろいろな御意見を伺いましたので、やはり継続して来ていただいている方々の意見というのは、大変熱があるいい意見を言っていたいているなということで、コーディネーターとして、心から感謝を申し上げたい、このように思います。

以上をもちまして、このサミットの全体会議を終えたいと思います。ありがとうございました。